

山  
ぎ  
ら

第31号 平成12年11月  
関東氷上郷友会



おもわず 新しい

# NEXT



人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。  
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業  
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

## ネクスタ株式会社

東京支店 111-0052 東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F TEL 03-3861-2331

## ネクスタ ラッパイ株式会社

東京工場 121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12 TEL 03-3849-6611  
千葉工場 270-0202 千葉県東葛飾郡関宿町台町2192 TEL 0471-96-1721

## ネクスタ パッケージ株式会社

栃木工場 323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938 TEL 0282-62-3321



山  
文  
子  
子

第  
31  
号

# 山ざる 第31号 目次

〈表紙〉常岡幹彦画「霽れゆく」(15号・春日町多利)

## △こあいさつ▽

郷愁……渡邊隆男 5

平成11年度「郷友集いの会」……6

祝寿の方々ご紹介……10／懇親会スナップ……12

## △ふるさと随想▽

母の生涯を想う……藤井宏次 14／ごうめんなあー……梅田重一 16

丹波松茸の今昔……木村つた江 19

ふる里滞在の記……石田勝彦 22

五十年前の青春時代の回想……坂本重雄 24

ふるさとの我が家……大槻作治郎 27

柏原高校野球部の思い出……大塚秀弐 29

蛭舞うふるさと……大木千里 30

氷上中学校時代の思い出……本城英明 31

丹波を撮る……撮影・徳田八郎衛 34

△近況・エッセイ▽

教えたくないモンゴルの魅力……………上 高子 38

後ろ向き歩行のこと……………井本義一 43

オリエント急行マレー半島の旅……………生田清弘 44

留学の副産物……………吉田勇司 50

日本海不審船事件と「山ざる」……………久保良雄 52

山鳥先生と森鴎外のこと……………谷口 捷 57

俳句・流寓悠悠……………田村三穂 61

△会員だより▽……………63

△わが師を語る▽ 松山確郎先生……………徳田八郎衛 66 / 久保良雄 72

△丹波通信▽ 氷上郡六町合併協議会が発足……………小田晋作 74

△ふるさとの祭り▽ 今出「権現裸祭り」……………足立和巳 76

△ふるさとの民話と伝説▽ 「柏野」の金の鶏……………78

△BOOKS▽……………80

△インフォメーション▽ 展覧会……………84 / 同好会……………86 / 同窓会……………87

協賛広告……………90 / 会計報告……………104 / 編集後記……………105



## 木挽歌

『青垣町誌』より

- 木びきさんたちやよい職なろた 米のまま食て金もらう
- 木びきさんたちや一升飯食ろて 小屋のぐるりははねだらけ
- 木びき殿にもちや向いの山の 杉や松の葉も恋し
- 都じゃというてわし連れ出して これが都か山の中
- なにの因果で木びきをなろて 知らぬ他の国の山住い
- 大工さんより木びきさんがにくい 仲のよい木をひき分ける
- 山でひるねすりや木の根が枕 落つる木の葉が夜具となる
- 木びき殿にもちや向うの山で うたう声ききや目もさめる
- 木びきさんたちや夜ひるきやる 夜は娘の袖ひきやる

# 郷愁

会長 渡邊隆男



皆さま、お変わりもなく日々  
皆さま、お変わりもなく日々  
ご清安のことと存じます。

「山ざる」誌31号が郷友多勢  
のご協力で、今年も立派に出  
来ました。巻末名簿に掲載の  
一五〇〇余人に届けます。

郷里の縁故者や郷友の二世三世を加えると、関東氷上郷友  
会のテリトリーは、いまや五、六千人にも広がりました。  
それでもこの広い関東では袖振り合うことさえできません。  
この名簿が同郷者唯一の手がかりなのです。この名簿があれ  
ばこそ毎年の懇親会も開かれ山ざる誌の発行もできるのです。  
どうか今一度、名簿の記録をご確認ください。生地や生年  
などの記載もれが多いためです。住所や電話番号などの訂  
正も、振替用紙の裏面などをご利用、ご連絡をお願いします。  
昨年末、山ざる誌発行の軍資金が心細くなったというので、  
会員にお願いしましたところ、会費・寄付金が続々と振り込  
まれました。ありがとうございました。お送りいただいた方々

## ごあいさつ

に、この紙上を借りて厚く御礼を申し上げます。世話人の理  
事一同、郷友の絆の強さを改めて実感した次第です。

山ざる——山去る——古里を捨て去った私たちは、「人間到  
る所に青山（墳墓）あり」と強がってはいるものの、いつも  
どこかに、うら淋しい「旅鳥」の思いがあるのです。この淋  
しさは何なのでしょう。帰る巢を失った鳥の孤独、二度と  
再び故郷に住むことのない宿命を背負っているのです。さり  
とて東京は、子々孫々に根を張るほど上等な土地ではありません。  
と。何十年住んでも「根なし草」の思いが消えません。

ところが、子供たちにそんな意識はさらさらないのです。  
この東京こそが生まれ育ったお里なのです。どうやら「郷

愁」という感傷は故郷を捨て去った者だけの病いのようです。  
住めば都、今さら丹波に帰り住むこともありません。健  
康と多少のお金と暇さえあれば、東京ほど便利で楽しめると  
ころはありません。世界中のどんな都市よりも東京は良い街  
です。世界の人々もあこがれるその東京に、私たちは住んで  
いるのです。お金も暇も、なければないで分相応、高望みさ  
えしなれば、心掛け次第で何不自由のない時代なのです。

若く、青雲の志を抱いてやってきたこの東京は、私たちの  
「第二の故郷」なのです。同じふるさとを持つもの同士の交  
流が、この山ざる誌を介して年に一度、九段会館で行われま  
す。十一月二十五日（土曜日）九段会館にお集まりください。

# 丹波の秋に思いをはせて…

平成11年度「郷友集いの会」



平成十一年度「集いの会」は、十一月十四日（日曜日）、九段会館において催され、総会、祝寿会、懇親会が例年のごとく、和気あいあいのうちに進行した。

総会は渡辺会長の挨拶のあと、藤田徹氏を理事に選任する件の議案審議に移り、満場一致の賛成を得て可決を見た。続いて坂上理事より会務報告、鶴田会計担当理事より会計報告、荻野監事より監査報告があり、いずれも承認を得た。

祝寿会では足立勲平氏（青垣町）、村上末吉氏（春日町）に、渡辺会長から祝詞と花束を贈った。足立勲平氏から「温かい励ましの言葉に感謝し、健康に留意して、ますます充実した日常を送りたい」旨の謝辞があった。

懇親会は、足立順治氏（氷上町・98歳）に乾杯の音頭をお願いした。いつもながらの氏のユーモアとウィットに富んだ「乾杯の辞」に、会場は一挙に盛り上がる。

来賓のごあいさつは、植田憲雄氏（関西氷上郷友会副会長・柏陵同窓会会長）より頂いた。「丹波はいまや秋一色、高源寺や達身寺の森に、おだやかな秋の陽射しが溢れている」と。ひとさわ郷愁をそそられる。

飲みかつ食べるうちに、会場はいつもと変わらぬ会話ののぼとなる。

今回も「お楽しみ福袋」への多くの協賛を頂戴した。福袋は、おかげさまで、年々内容が充実し、参加者にとって文字



通り「お楽しみ」に定着した。

会からの贈りものは、おなじみ丹波山芋（三キログラム入り）と当年度産黒豆（五百グラム入り）各五個。抽選で十人の方々が幸運を射止めた。

午後三時三十分、お開きとなる。

（坂上勝朗・記）

●平成十一年度「集いの会」出席者（順不同・敬称略）

〈来賓〉（二名）

植田憲雄（関西水上郷友会副会長）

大浦隆司（神戸新聞東京支社長）

〈祝寿〉（二名）

足立勲平 村上末吉

〈会員〉

○青垣町（二名）

足立和巳 足立静雄

○市島町（十名）

芦田重秋 荻野武 片岡クミ子 木村つた江 近藤勇

高見嘉都司 鶴田ゆき子 藤田純 藤田徹 丸川宥次郎

○柏原町（九名）

生田清弘 岡吉明 岡洋子 小田晋作 小田富士夫

加賀山次郎 坂本重雄 鈴木和栄 徳田八郎衛

○春日町（六名）

足立知佳子 上田脩 木呂子恵美子 吉住重造

今田二三夫 久下善生

○山南町（十二名）

池田忍 大木美美代 小田明子 岸本明 久保春雄

久保良雄 高田俊樹 田中寛 千葉淳子 中居篤子

若森敏郎 渡辺貴美子

○水上町（十四名）

足立順治 足立正喜 大地富美子 岸本勲 坂上勝朗

谷口捷 山口和久 山口茶々 足立吉雄 渡辺隆男

足立省一郎 塚口智 長尾貴美代 余田知弘

○篠山市（二名）

梶原清 小山元和

●お楽しみ抽選会景品寄贈者（到着順・敬称略）

足立 順治 サントリー・オールド

水上高校 自家製味噌

同 醤油

足立 静雄 草加せんべい 一〇袋

常岡 幹彦 讃岐薄塩天然だし醤油 二箱

上野 重喜 司馬遼太郎「日本史探訪」 三五本

トルコ・インドシナ小品 各五品

堀井 隆川 ビデオ・テープ 五本

坂本 重雄 お菓子(おさかな合唱団) 一〇袋

岡 吉明 但馬牛・猪肉佃煮 一〇個

小田富士夫 お菓子(つくね) 一〇個

岡林 逸男 丹波ワイン 四本

坂上 勝朗 新巻鮭 五本

高見嘉都司 三省堂国語辞典 三冊

木村つた江 アーモンド・クッキー 四〇箱

近藤 勇夫 勤三郎せんべい 二箱

岸本 勲 ポーチ二〇枚、ゴルフボール一打、焼酎一本

Tシャツ四枚、メモセット一組

まねきねこ貯金箱三個

押し入れシート五枚、石けん四個

レース・シート五枚、収納ポーチ五個

アロマテラピー一セット

荻野 武 ビデオ・テープ 三〇本

谷口 浩章 小倉屋えびすめ 五個

丸川宥次郎 韓国産のり(ごま油つき) 一〇帖

高見 秀史 ワイン 六本

上田 脩 ランチョン・マット 一〇枚

西川 宣孝 ビール券 六枚

吉住 重造 両国屋是清の菓子 五個

鶴田 宏 明治ミルクチョココレート 一〇〇枚

千葉 淳子 大納言小豆 一〇袋

篠原よね子 アルファー米赤飯 五箱

中居 篤子 アルプスのモカロール 一〇箱

足立 誠一 テレホン・カード 二〇枚

片岡クミ子 篠山凍り豆腐 一〇袋

足立 和巳 日高昆布 七袋

とろろ昆布 三袋

久保 良雄 海上保安グッズ(キーホルダー) 三個

木呂子恵美子 万歩計 二個

渡辺貴美子 黒ごまペースト 五本

梶原 清 著書『福知山線今昔物語』 六〇冊

渡辺 隆男 雑誌「書画船」一・二号 各六〇冊

出町 京子 郷土の味 五箱

徳田八郎衛 筆ペン 一〇本

関東氷上郷友会 丹波山芋三キログラム 五箱

黒豆五百グラム 五箱

●寄付者芳名

植田 憲雄殿

(柏陵同窓会長)

岸本 明殿

(兵庫県東京事務所)

村上 末吉殿

近藤 勇殿

足立 勲平殿

駒宮 和子殿

塚口 智殿

堀井 隆川殿

若栗すぎ子殿

上 高子殿

山田 叔子殿

山名 靖英殿

波多 洋三殿

橋本 真二殿

足立かをる殿

水船 隆昌殿

上武 正次殿

岸田 勇殿

一〇、〇〇〇円

一〇、〇〇〇円

一一〇、〇〇〇円

一五、〇〇〇円

一三、〇〇〇円

一〇、〇〇〇円

一〇、〇〇〇円

一〇、〇〇〇円

一〇、〇〇〇円

八、〇〇〇円

八、〇〇〇円

八、〇〇〇円

八、〇〇〇円

六、〇〇〇円

六、〇〇〇円

六、〇〇〇円

五、〇〇〇円

五、〇〇〇円

高見嘉都司殿

谷口 捷殿

谷口 浩章殿

宮野 近殿

鶴田ゆき子殿

本田 靖彦殿

足立正喜・千佳子殿

葦田 冬子殿

生田 清弘殿

近藤 勇夫殿

鈴木 千世殿

中村 武子殿

浜田美代子殿

平元富美子殿

藤田 玲子殿

山口 和久殿

渡辺 圭三殿

北砂 七殿

足立 吉雄殿

池田 忍殿

大木美美代殿

大地富美子殿

五、〇〇〇円

五、〇〇〇円

五、〇〇〇円

五、〇〇〇円

四、〇〇〇円

四、〇〇〇円

三、〇〇〇円

三、〇〇〇円

三、〇〇〇円

三、〇〇〇円

三、〇〇〇円

三、〇〇〇円

三、〇〇〇円

三、〇〇〇円

三、〇〇〇円

三、〇〇〇円

二、〇〇〇円

二、〇〇〇円

二、〇〇〇円

二、〇〇〇円

二、〇〇〇円

二、〇〇〇円

加賀山次郎殿

木呂子恵美子殿

栗田 節子殿

坂上 勝朗殿

千種 倫幸殿

吉田 勇司殿

千葉 淳子殿

足立 誠一殿

荻野 秀夫殿

近藤 輝雄殿

坂口 充子殿

直田 正殿

田中 祥生殿

竹内 光子殿

豊嶋 幹雄殿

東田 実殿

森田 清子殿

山名 清弘殿

大石佐代子殿

小糸 イキ殿

笹倉 郁子殿

二、〇〇〇円

二、〇〇〇円

二、〇〇〇円

二、〇〇〇円

二、〇〇〇円

二、〇〇〇円

一、〇〇〇円

一、〇〇〇円

一、〇〇〇円

一、〇〇〇円

一、〇〇〇円

一、〇〇〇円

一、〇〇〇円

一、〇〇〇円

一、〇〇〇円

一、〇〇〇円

五〇〇円

五〇〇円

五〇〇円

五〇〇円

五〇〇円

郷友会では、毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる七名の方々に、以下の項目につきアンケートを依頼しました。そのうち、三名の方々から回答いただきましたのでご紹介します。

(生年月日順)

〈アンケート項目〉

- ① 生年月日
- ② ご出身地
- ③ 上京の年月日
- ④ 上京の動機
- ⑤ これまでに最も印象に残ることば
- ⑥ 祝寿を迎えられてひと言

〈生まれ同年・大正9年〉大正3年に勃発した第1次世界大戦が7年に終結し、その間に特需景気を謳歌していた日本経済は、たちまち反動不況に見舞われた▼第1回国勢調査が行われ、5800万人(うち外地210万人)と初めて日本人口が統計になった▼冬の流行性感冒で多くの死者を出した。

〈二十歳の年・昭和15年〉前年数えて20歳の兵隊検査を済ませ、皇紀二千六百年記念のこの年は日伊独三国同盟の締結もあって国威はいやが上にも高揚、翌年は運命の太平洋戦争へと突入していったが、その戦争で多くの同輩を失った。

〈還暦60歳の年・昭和55年〉戦後早くも35年、復興から高度経済成長へと額に汗して働き、生活も豊かに安定してきた中での祝寿の年。日本の自動車産業がアメリカを抜いて世界一になり、経済大国として戦後の目標は達成したが……。

能勢 初代様

- ① 大正9年2月19日
- ② 水上郡春日町小多利
- ③ 昭和13年
- ④ 主人の勤務地(日本橋へニ株式会社)のため

⑤ 主人は召集を受け、南方戦線に従軍しましたが、運良く帰って参りました。しかし戦後の事として生活も厳しく苦労が続きました。只今は子供達も順調に育ち、会社勤務をしています。私としては自分の健康に注意しながら、畑仕事も馴れませんが、少して

も生活の足しにと頑張っております。只今はとても楽しく、野菜の成長に感謝の生活です。

⑥ 家族、世間の皆様に迷惑をかけるまいよう生きて行きたい、明日の事とてわかりませんが、幸福を感謝の毎日でございます。兄妹の音信が励みでございます。

## 祝寿の方々と紹介

### 婦木 一男様

- ① 大正9年4月25日
- ② 氷上郡春日町野村
- ③ 昭和16年1月10日
- ④ 兵庫県立柏原中学校卒業後、南満州鉄道株式会社に入社し四年程勤務したが進学のため退社。
- ⑤ 錦州鉄道局に勤務していた時、

お互い兄弟のように上下の差のない楽しい毎日であった。

○今地震で苦しんでいる神津島へ出張販売に行った時、島の人に親切にされ大きな亀がとれてご馳走になったこと。

○桶に乗けてその中に乗り、娘さんが頭に乗せ海岸を散歩してくれたのにはびっくり。あまり

にも力があるのに驚いた。二度とない思い出であった。

⑥胃潰瘍で入院し昨年は腎臓癌で左側の腎臓を摘出、今年に胸腺腫の疑いで手術したが癌の転移ではなく安心した。このように大病をしたのに八十歳まで生きてこられたことがなによりも祝寿である。

### 久保 義広様

- ① 大正9年12月16日
- ② 氷上郡山南町
- ③ 昭和22年4月
- ④ 私の勤務していた会社の本社が大阪から東京に移行したためです。

⑤九州で敗戦を迎えました(沖繩に行く予定でした)。そして数カ月後に郷里に帰ることが出来たのですが、途中列車が広島駅

を通過する時に、原爆のために線路の枕木が黒く焼けていたのが今も映像として思い出します。そして予告なしに家に帰ったのですが、父母が喜んでくれたのを懐かしく思い出します。

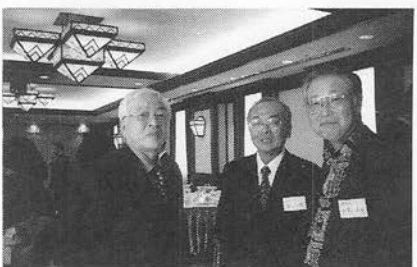
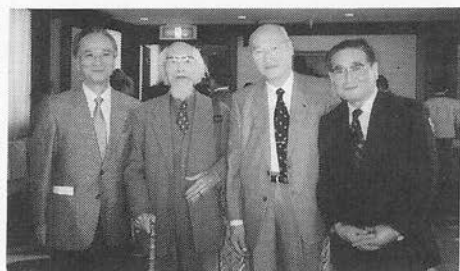
⑥世界はグローバル化が進んでいます。日本もリストラを伴う企業合併や店舗の大型化が行われています。このことが私たち人間にとって果たして幸せなのか疑問に思います。私のような年

齢になりますと、もっと落ち着いた日本、それは自然が豊かで、各人が親しみをもち、また痛みを共有できる心から愛せる日本を夢見ています。



# 懇親会スナップ





懇親会スナップ

# ふるさと随想



## 母の生涯を想う

藤井宏次（黒田庄町）

三十一年前に母を見送った私も、来年は古稀を迎え、母が他界した年になります。深い愛情で戦中戦後の苦難の歲月を子供達の養育に悪戦苦闘した母のことは生涯忘れることが出来ません。母は、明治三十三年に丹波は沼貫村（水上町）朝坂にて生を享け、小学校長を勤めた祖父と純朴な祖母の最初の子として大変大事に育てられたそうです。それでも遠く離れた小学校に雪の日などは素足で走って通ったことや郷土出身の政治家、故有田喜一先生も同期生であったことなどよく聞かされました。

婚前教育のため神戸の塩原女子高等技芸学校にて何年か学んだ後に、播州黒田庄は喜多村に嫁して三男一女に恵まれ、私は次男であります。

結婚当時、父は比延第二小学校長を勤めていたのですが、病気で一度退職してからは、他町村の数校に勤務の後、昭和十五年頃、和田小学校で教員生活を終え、当時の国策に沿って硅石採掘事業を始めました。丹波の山で採掘した硅石（耐火煉瓦の原料）を鉄道にて高砂へ、それより船で八幡製鉄所



に送ったそうです。その関係で私と姉とは何回か高砂へ海水浴に連れて行って貰って、とても嬉しかったことを覚えています。

子供の頃の母との最初の思い出は、母に連れられての歯医者通いでした。当時、私の村には歯医者がなかったので、鉄道(当時の私鉄播丹鉄道)で新西脇へ、それから徒歩十五分で村上齒科医院に着きます。チョビ髭のでっぱり太った白衣の院長先生のおだやかな顔が今でも目に浮びます。

当時の鉄道は一輛編成の通称レカ、仇名はマツチ箱という超小型の気動車一輛編成で、板張りで油に汚れた床や、床の節穴から下の線路が見えたことを思い出します。それでもスピードを出すと、電柱がどんどん後に流れて行くのが不思議に思われました。

もう一つの思い出はやいと(灸)です。私は幼少の頃、胃弱で度々吐いていました。ある日、父が高砂近くの新在家の灸の先生に私を連れて行き、その後は家で母が週一回、腹と脇腹に四ヶ所灸をすえてくれました。熱くて熱くて嫌でしたが、半年後に胃弱は完全に治っていました。

母が独身時代を送った神戸はとても良かったらしく、外人居留地などの話をよくしてくれました。私が神戸で外資系会社に勤めるようになったのも、或いは母の影響があったのかも知れません。母の愛唱歌は「散歩唱歌」「天然の美」「真白

き富士の峯」等で、日頃口ずさんでいましたので、私達も自然に覚ええました。

私が柏原中学に通学していた頃は、ガスは勿論炊飯器や湯沸器もありません。母は毎朝四時半に起きてくどで釜の飯を炊いたり湯を沸かしたりで、真冬はとても辛かったろうと思います。それでも五時四十分黒田庄筈谷川行に間に合わせねばなりません。よく母が煙にむせながら火吹き竹で格闘している様子が、寢床にいる子供達にもわかりました。戦後は田舎でありながら非農家の私の家では食糧には大変困りました。子供四人のほか、おばあちゃんを含めて七人の大家族で、母は並々ならぬ苦勞をしました。特に戦後、父の仕事が無くなり、無収入の家計のこととて、それはそれは大変でした。

私が神戸に出る事を決心したのは二十歳の時でした。両親の近くに住んで孝行をしたい気持ちもありましたが、将来を考えてのことです。昭和二十六年十二月に外国汽船会社に就職後、三ヶ月は垂水の親戚に居候。その後、須磨に下宿を見つけ、気楽な独身生活を楽しみ故郷にも一ヶ月一度は両親の顔を見に帰省出来ました。しかし、三十三年秋に東京転勤後は、結婚、子供誕生、転居等々公私共多忙のため帰省もままならないままに、昭和五十六年に父も九十歳で他界しました。これといった孝養も尽せぬままに父母と別れたことは、誠に残念の極みに思う今日この頃です。

# 「ごうめんなあー」

梅田重 一一（山南町）

六十年振りの小学校の同窓会に出席した。正確には、昭和十八年和田村立国民学校初等科卒業の同窓会である。横浜からの参加は、一番の遠方で、五十人の温かい瞳で、歓待を受けた。懐かしく、楽しいひとときであった。只一つ残念なことがあった。「丹波弁」が聞けなかったことで、皆、流暢な標準語であった。関東で偶に会う同郷の人々は「丹波弁」の達人である。

黒田庄村は、川一つしか隔てていないのに、イントロ口と語尾の抑揚が、微妙で、とても真似の出来る代物ではない。いわゆる「播州弁」である。赤穂浪士が江戸に潜伏中、一番困ったのは、身につけて離れない「播州弁」であつたらう。白井権八が、鈴ヶ森で諍いさかいを起こしたのも、「因州弁」と「江戸弁」が噛み合わなかつたのであろう。播随院長兵衛は、それを読んでいたのではなからうか。

余談はさておき、和田と柏原とは、まるで他国のように思えた。柏原では「先生がそう言うトツチャタケエー」と言う。和田では「先生がそう言うとなさつたカー」と言う。

柏原の「チャタケエー」が気になって仕方になつた。当時はラジオのある家も少なく、一つの村に生まれ育ち、老いていく。村を出ることもなく、狭い地域社会で、諍いさかいもせず、円満に一生を終えるのには、それぞれの村独特の「玉虫色弁」が永い間に育つていたのであろう。和田では、小学校高学年までの子女が、他家の門口に立つ時、「ごうめんなあー」と大きく声をかけた。商家であつた私の家の前を通り過ぎる大人は「よう儲けるノォー」と父親に声をかけてくれた。他人に話す時は「よう儲けとつチャアゲ」である。

## 昭和十四年宝塚遊園地

三歳年長の従兄、吉田良彦兄が、体育の授業の相撲で、足を挫いた。修学旅行に行けなくなり、叔父がそれを憐れみ、宝塚への日帰り旅行と洒落込んだ。日本生命の支社長だつた叔父は、高井医博に礼を尽す必要からか、子息の嗣郎さん、それに私と従姉が御相伴し、一行五人であつた。小学三年生だつた私は、汽車に乗るのは初めてであつた。母親が小遣錢にと、五十錢持たせてくれた。宝塚遊園地での、動物園や子供列車の記憶は薄く、大劇場での、華やかな舞台の記憶も希薄である。幕間に二人掛りで、紙芝居の大きな箱をコロコロと持ち出して、道化師宜しく、紐を引っ張ると、ペロッと「一つ目小僧」が飛び出したりした。その仕草が面白く愉

快で、次の幕間が待ち遠しかった。

大浴場に男子三名で入った。佐治川で鍛えられていたので、泳ぎは得意であった。お客さんも少なく、三人は縦横無尽に泳いだ。叔父と従姉は、どの風呂に入ってたのか、今さら聞くよすがもない。

帰路、宝塚駅への路上の売店で「少年倶楽部」を買った。

確か三十銭位ではなかったろうか。「冒険ダン吉」「のらくろ」それに樺島画伯の「ペン画」を、何回も何回も飽きずに眺めたものである。売店には、人だかりがあったが、「ごめんなあ」と大きな声を張り上げた。周囲の人がドッと笑った。何故笑われたのか、その時は解らなかった。好意的な笑いであったのが救いであった。

銀太・いだ・もと・糞たなご

小学校六年間で、魚釣りなど殺生とは縁を切っている。父は魚釣りが趣味で「鯉」とか「いだ」の大物釣りである。別の一派は格好よく、瀬を流して釣る「かがしら釣り」である。毛バリ論議をやって、物議を醸した政治家がいたが、丹波では「かがしら針」という。こちらは魚を騙すより技術でいく感じをする。

高学年になって、「いだ釣り」に連れて行って貰った。掛かると豪快であった。受け網を上手に操らないと逃げられた。

少年達は「浮き釣り」が本命で、「桜たなご」ならまあまあ。「糞たなご」ばかり続くと、又糞かと腐った。たまに、「ギンタ」「やまもと」が掛かった。「ギンタ」は顎に鋭い針を持っていて、ギーギーと泣いた。戻し針を抜く時、何回も刺されて痛かった。「なまず」をスリム化した体形で、煮て食うと美味であった。

社会人になって、神戸・大阪・名古屋・東京と勤務した。釣り人に「イダ」とは何という川魚でしょうと伺っても、満足な答えは返ってこなかった。数ヵ月前、NHKの番組「ひるどき日本列島」で大分県の村人が、「うぐい」のことを、この辺では、「イダ」と言いますと言われた。嬉しかった。九州と丹波では「イダ」が「うぐい」である。では、「銀太」は、「やまもと」は「しらはや」はとなると、もうお手上げである。釣りをやらなくなったのも、鯉釣りに沼貫の方へ行っただ父が暗くなっても帰ってこない。川に落ちたのではないかと心配になり、村はずれまで何度も迎えに行った。こんな少年の思いが、釣りをやらなくなった遠因ではなかるうか。

昭和二十五年宝塚中劇場

昭和二十五年に会社の独身寮が、宝塚市逆瀬川通りに新設された。薄給で、日曜日の小遣銭に不自由していた。誰かが、宝塚遊園地の入園料を支払えば、中劇場は無料であると言う。

入園料は確か二十円であった。映画が五十円。プロ野球が百円の時代である。中劇場では、片岡一門の舞踊や「南都雄二・ミヤコ蝶々」「ミスわかさ・わかさ」「夢路いとし・喜味こいし」等の一流の芸が無料で観られるのである。小林一三様々である。

某日、友人と生瀬・武田尾へハイキングに行った。その時、中劇場に出ている、これら芸人の一団と一緒にあった。終日、行動を共にしたので、会話の端々、汽車賃やお茶菓子代等の「割り勘」のやり方、微笑ましく、又質素で誠実な一団であった。

某日、西宮北口会館にて、劇団「民芸」の「かもめ」が上演された。こちらは、入場料百二十円也であった。主役は宇野重吉・北林谷栄で、演出は滝沢修であった。その時のパンフレットに北林谷栄さんが「百日草の茎に薔薇は咲かない。しかし、せめて色濃くありたい」と述べておられた。舞台上は、色濃く華やかで、観客は魅了されていた。歌舞演劇に凝った訳ではないが、二十二歳の青年の青春のひとつとき、僅かな偶然の経験が、人を尊敬する大切さを、無言の教訓として教えられた。

「誠実」ということが、如何に大切なことであるか、それに気力・体力・努力が加わって、その道、それぞれの一流になり得る。五十年を経た今日、今なお一流の演劇人として、活

躍されているのは、微笑ましい限りである。

### 丹波人の古稀

七十歳に達して、両親はもとより、叔父・叔母も全て他界している。血は少し薄まって従兄・従姉が健在である。宝塚に連れていってくれた叔父は、終戦後の三十年間に、百二十数組の縁談を纏めた。驚くべきことに、離婚が皆無である。私は残念ながら、頼まれ仲人を十数組しかやっていない。その少ない中から、離婚の第一号も出ている。叔父の記録は真似をしようにも、驚くべき記録で、挑戦する気力もない。

ただ、私達同世代が誇れるのは、「明治の人」に教えられ、激動の昭和を生きた「十九世紀人」である。十九世紀人として、「二十世紀人」に何を残し、何の実践教育をしなければならぬのであろうか。大きな大きな課題で道は遠く、険しい。

乱文「ごめんなあー」である。



## 丹波松茸の今昔

### 木村 つた江（市島町）

昭和四年（一九二九）の秋、私は父の用事で福知山線市島駅に行った時のことです。駅の貨物倉庫の前を通りかかりました。中から松茸のいい香りが漂ってきて、びっくりし、よく見ると倉庫の中には、木製のリング箱（別名石炭箱）が山積みされていました。この箱は横巾七十センチ、縦四十七センチ、高さ五十七センチ位あり、箱には丹波松茸の絵が描かかれたシールが貼ってありました。当時市島駅は、貨物列車の停車駅になっていたのです。それにしても、あまりの量の多さに二度びっくりいたしました。

昭和六年（一九三一）十二月、私は尊敬していた教頭先生の口ききで単身上京しました。先生の娘さんの嫁ぎ先は、東京本郷四丁目で酒店を営んでいました。私は花嫁修業のため、妹さん夫妻（光山氏）のもとに身を寄せました。

上京して三年目に初めて親元へ帰ったのです。娘らしくなった私を見て両親は安心したようでした。たまたま父が村山に松茸取りに行くというので、私も同行しました。当時、岩戸部落は、殆どの山が村人所有の財産だったので、山掃除も、

松茸取りも共同することに決められていました。

仲間の信さんと、父と、三人は大きないどこを持って、西側の小高い山に入りました。百メートル程上ると、いい香りが漂ってきました。獣道の両側には、人が傘をさして行列しているかのように見事に生えていました。こんな光景に出会ったのは初めての私は有頂天になっていました。

「小さいのがくばの下に隠れとるさかい、お前踏んだらあかんぞよ」

後から父の声が飛んできました。一時間足らずで、三人のいどこの中は満杯になり、父たちは天秤棒でかついで山を降りました。

それから数年間、父は娘かわいさからでしょうか、秋になるとリング箱一ぱいの松茸を、光山氏宅に送りつづけてくれたものです。

昭和十六年（一九四二）四月、私は平凡な見合い結婚をし、東中野の借家に新居を構えたのです。この年の秋に、父は新居にリング箱一ぱいの松茸を送ってくれました。同年十二月八日太平洋戦争が勃発しました。それ以後、降父からの松茸便は途絶えてしまいました。

### 松茸にちなんだエピソード

終戦後の食糧難の時代も二十年後は、うそのようになくな

り、昭和三十九年のオリンピック以降、日本経済は高度成長の真っ只中、私達一家は杉並から現在の調布に引っ越してきました。そして夫はホテルの清掃会社を経営していました。

四十二年の秋、私の実家の姉から電話があり、父が自分の小遣いを全部はたいて松茸山を落札した。かなり高額なので心配して父に尋ねると、「なに、東京の木村が来るよろさかい、べっ・ち・よないでよ」とすましているというのです。

夫は、父の望みを叶えてやりたいと心よく承諾しました。そして桜上水に住んでいる義姉と、神戸の従姉妹三人と、私達夫婦の総勢六人で一泊二日の松茸狩りを楽しみました。当時は昔ほどではないが、そこそこ生えていて皆、大喜びしたものでした。

その年、妹の嫁ぎ先では、大阪の知人から「本物の丹波松茸を、冥土の土産に山に入って取りたい」という七十五歳の老婦人と、その息子さんとを迎えていたのです。妹の家では、よく生える松茸山を持っていたので、この母息子を、妹夫婦が案内して山に入りました。

山の中腹では何とか歩くことができた老婦人も、松茸の生えている尾根近くまでは足が動きません。息子さんが後から押し上げたり、妹の夫が引張り上げたりして漸く尾根近くまで来て松茸に出会いました。御婦人曰く「松茸がこんなに土にしっかき根をおろしているなんて全く知りませんでした。

ムジムジと音がしてやっと一本取れました」と、とても感激しておられたそうです。

さて下りは、かなりの急斜面なので、息子さんはお母さんを背負って山を降りられた由、帰阪なさってから、妹宅に老婦人から、「一生に一度の嬉しい経験をさせて頂き、心より感謝しています」と丁寧な札状が届いたとのこと。そして、翌年の夏に息子さんからご母堂さんの計報の便りが届いたそうです。

それから数十年間は、秋になると妹から、三キロ程入った籠入りの松茸が送られてきました。酒好きの夫は、どびんむしや焼松茸を、子や孫たちには松茸御飯をふるまっています。夫は昭和五十六年に会社を解散し、その翌年、軽い脳梗塞を患って寝たり、起きたりの毎日でした。

昭和五十八年十月二日、夫は松茸の様子を聞いてほしいというので、妹宅に電話を入れました。その日は、折悪しく水上郡一帯に集中豪雨があつた翌日で、妹宅も谷川の水が溢れて床上浸水し、大騒ぎの最中でした。夫は、すぐ見舞金を送るよう私に言いつけました。

夫はその日から十日後に、心不全で急逝したのです。夫の葬式当日、妹から札状と一緒に、籠に入った松茸が届いたのです。私はそれを籠のまま仏前に供えました。住職の読経の

声とともに松茸の香りが室内に漂い、私のせつない気持ちを一入深めたものでした。

村の古老から私は次のような話を聞いたことがあります。

「松の木の寿命を、仮に二百年とすれば、若木の七十年間は生えず、壮年の七十年によく生え、後の七十年は老木のため、徐々に生えなくなるのだ」とのことでした。私の体験から、なんとなく頷けるように思えるのです。

ある植物学者が何年も前から、松茸の人工栽培の研究を重ねておられるようですが、いまだに成功していません。松茸は、気象状況とも深い関係があるらしく、八月に全く雨が降らないと駄目で、九月の末頃に適当に雨が降り、気温が下がると、その年は豊作だということです。その他にも、山の掃除をしなくなったこと（落葉かき、下草刈り）落葉をかわいて、松の根にホウシが付着するようにし、下草を刈って日光も当たるようにしなければいけないなど、香りのいい丹波松茸は、繊細な自然環境を整えなければ、生えてくれないようです。

戦後の昭和三十年代の農薬散布。四十年代の高度成長下の燃料の変化、松喰い虫の大量発生、松の木の高齢化、松茸山の下をトンネルを通し、近舞高速道路が開通したことなど、いくつもの悪条件が重なってしまいました。平成六年頃から

急に生えなくなり、村の入札価格も大幅に下げられたようです。

妹の家でも、平成七年に夫が他界し、三人の息子は家を出て社会人となり、妹一人が山に入るようになりました。この頃になると、市場価格も一キロ十万円以上という高価になったようです。それでも需要があるのか、大阪方面の商人が、妹宅に数人買付けに来るらしく、売りたいが品物がないとこぼしていました。昨年などは、山全体で五、六本しか生えなかったそうです。

昨今は、香りのない松茸ならば、中国や韓国産の物が、安価でスーパーの店頭に並んでいます。しかし、私は丹波松茸の香りが忘れられず、こだわりつけているのです。

戦後半世紀を経た現在私達は科学の目ざましい発展の恩恵を受けてきました。その反面、自然環境の悪化がますます進んでいるように思います。丹波松茸を昔のように蘇らせるのは無理としても、これ以上自然が破壊されないことを切望して止みません。



## ふる里滞在の記

石田 勝彦（春日町）

本年二月十一日、母が死去（享年九十一歳）し、葬儀のあと忌み明けまでの五十日間をふる里で過ごすこととなった。これほどの長い間ふる里で生活することは高校を卒業（柏高六回生）して上京以来のことであり、亡き母への思いと、なつかしい幼少の頃の記憶が交錯する中で特に印象に残ったことを書くことにする。

### 一、児童の挨拶

二月下旬の寒い朝屋外に出ると、元気にランドセルを背負って集団登校する児童と出会った。突然「行ってきます」との大きな声が私に向けられ、一瞬戸惑いながらも「しっかり勉強するんだよ」と言葉を返した。児童たちは素直にうなずくかのように満面に大きな笑みをうかべながら通り過ぎ、次々出会う人たちにも大きな声をかけていた。

こころみに下校する児童たちに「しっかり勉強をしてきたかね」と言葉をかけると、「帰りました」との元気な声が一斉に返ってきた。数日後、母校の小学校を訪ね校長先生にお

出会いました折、児童たちの挨拶について尋ねてみた。

先生は「児童たちが、どの程度実践しているか自信ありませんが、挨拶は幼児教育の基本であり、この恵まれた自然と風土の中ではぐくまれ成長する児童たちに、少しでも郷土愛を芽生えさせるためにも学校、家庭、地域の大人たちが一丸となって、挨拶運動をすすめているのです」とのことであった。最近、幼児期からの教養教育の在り方が取り沙汰されているが、まさにその原点はこのような児童自らの実践の中にこそあるのではなからうか。

### 二、丹波の味覚

亡き母の忌み明けまで、七日ごとに近くの親戚や母の懇意であったお年寄りが、手作りのふっくらとした黒豆煮、小豆あんこたっぷりのはた餅、風味のある山菜佃煮や野菜漬物などを持ち寄り、それぞれに仏前に供え、ご詠歌のあとみんなにふるまうのであるが、そのおいしいこと。「なんでこんなうまいものが」またその時の丹波茶の素朴な香りとまろやささが、さらに味を深くしている。かつて食の哲人とまで言われた北大路魯山人が愛してやまなかつたものが、丹波の松茸、栗、黒大豆、大納言小豆などの食材であったことを聞くと、うまいのは当たり前、ただこの絶妙な味は、地方誌によると秋の収穫期の丹波特有の深い霧と寒暖差によってはぐくまれ





神池寺本堂と澄まざるの池



夏の家



ることである。まさに都会の食生活になれた私にとって、この年にして知るふる里の味であった。

### 三、神池寺での再会

私の生家は妙高山を背にしたふもと（旧大路村）にある。その山頂近くの神池寺で高校三年のひと夏を受験勉強で過ごすため、同窓の上野重喜君（氷上町）と、母の準備してくれた米一斗袋を背負って登った思い出があり、再び訪ねることを思い立った。

三月十一日、早朝に家を出て記憶をたどりながらの山道だけに約一時間半余りかかった。先ず右手に「澄まざるの池」が目に入った。かつてはうっそうとした中に霊池の雰囲気すら感じられたが、今は周囲の木々が伐採され明るい池に様変わりしていた。その隣の広場に一見体育館のようなモダンな施設があり、ここ数年来県の自然公園の清遊地として夏には多くの人が訪れるとのことである。

そこを過ぎると広い境内で古い建物が左右に点在し、さらに急坂の石段を上がると本堂にたどりつく。ただ屋根からの雪が通路を遮り、しばし佇んでいると、後方から同年輩の男性が近づいてきた。「どちらからですか」と尋ねると、「神戸から市島の兄の家に立ち寄り、子供の頃の二十六夜さんがなつかしくて……」という返事。二十六夜さんと言えば、私も

母に連れられて登った思い出がある。その話題で二人は本堂横に腰を下ろし、ひととき余りを語り合った。

そして別れ際に名刺を渡し、立ち上がろうとした時「なんだ、石田君ではないか」「高校当時同じクラスで机を並べた高見修だよ」との声に、お互いに顔を見合わせ、あらためてその面影のあることに感きわまり、固く固く握手を取り交わした。この人里離れた幽遠の地での奇遇に、亡き母の思い出を重ね、思わず心仏に合掌し別れを惜しみながら下山をした。

#### 四、同窓会

忌み明けの翌三月三十日、昭和二十六年大路中学卒業生三

## 五十年前の青春時代の回想

― 柏原高第三回卒業同期会に出席して ―

坂 本 重 雄 (柏原町)

さる六月二十四日、高校の同期会出席のため福知山線に乗り、丹波柏原を訪ねた。

太平洋戦争の末期、一九四五年四月に旧制の柏原中学、柏原高女に入学し、その八月十五日に終戦を迎え、戦後の混乱

十一人が集まり、四十九年ぶりの同窓会を催した。なにしろ戦後間もない混乱の中、それぞれの苦難の道を乗り越えてきた「つわもの」揃いで、とりわけ東京からかけつけてきてくれた近藤仁司、金出一郎、山本哲弘の三君は東証上場企業現役の社長(同窓の中から三人の輩出は驚きである)だけに、会の盛り上がりも最高潮に達し、昔の思い出や近況を語り、深夜まで美酒を交わした。

翌早朝、東京の三人と数年前海外で逝去した田村克典君(日商岩井ニューヨーク支店長等歴任)の墓前に花を手向け現地解散、私は静岡への帰途についた。

期の学生生活を経て、三年後に新制の柏原高校に編入学を認められ、高校入試を免れて計六年間の学園生活を送った特異な世代の柏高同級生である。

〈一〉卒業記念アルバムなどもなく、卒業後三十周年記念の同窓会で、「卒業記念誌―はるかなる青春の日々」(B5判一〇四頁)を発刊し、同時に記念旅行を実施したという同窓生の仲間である。一九七三年から二年おきに同期会を開き、同窓の仲間意識や連帯感強いようである。

今回は、母校の構内に新築された柏陵同窓会館で、第十二回目の会合をもち、恩師四名の御参加を得て、八二名の同期生が集う盛会となった。三〇九名の卒業生の内、すでに四二名が逝去されている。大部分の者は一九三二年の「申（さる）年生れ」だから、「山ざるの会」ともいえよう。

還暦も過ぎ去り、六七、六八歳を迎え、多くの者は定年退職し、悠々自適の生活をするものが多いが、まだ現役で仕事を続け頑張っているものも少なくない。飲んで騒いで共に語り合って旧交をあたため、「次の会まで生きていればね」と冗談をまじえ、再会を期待して別れを惜しんだ。

（二）終戦前後の混乱期は、例年八月十五日を迎えると日本人の忘れたい記憶として思い出されるが、時代とともに風化している。私たちにとっては、中学・高校生という青春時代の六年間でもあることから、その思い出は強烈な印象として残っている。

兵庫県立柏原高校は、その前身旧制柏原中学校として、県内で第四番目に創設され、一九九七年四月に創立百周年を迎えた歴史と伝統のある高校である。それまでに「七十周年記念誌」（一九六六年、A5判二八八頁）、「柏原高校百年史」（一九九七年、B5判五四四頁）が刊行され、その歴史と現状の概要を理解することができる。それらの記念誌は高校を

とりまく時代環境の変化も反映されており、旧制の中学、高女時代から新制高校発足の時代では、当時の地域社会のエリート階層であることが印象づけられる。

食糧事情が良くなかった当時、京阪神地区から丹波の農村地帯に疎開で転入してきた人達の子弟も少なからず定住した。柏高生の「質実勤勉」型の学生気質に、都会育ちの学生のもつ教養文化に富む進取の気質が影響を与え、学業のほか文化・体育の諸活動にもプラスに作用したと思われる。受験勉強一辺倒ではなく、生徒会自治活動が活発であった。大学進学者は在学生の三〇％程度であり、当時競争の激化していた京阪神の国立大学一学期にも現役で二〇名が合格していた。音楽、気象、生物、弁論の各部は全国レベルの水準で活躍していたし、野球、テニス、陸上競技など体育会系の実績も注目され、駅伝競技では県下で三位、四位を占めていた。当時は高校卒業でも遜色のない学歴として評価され、安定した企業への就職の道が開かれており、地元に残って家業に従事する者も少なくなかった。

大学進学者は同級生では三〇％でも、全国的な統計では短大を入れて二〇名に一名程度で勉学意欲の高い者が受験し、現在のように意欲がないのどこかの大学に入学するという風潮は少なかった。同級生たちは、都市部の進学校出身者に劣らぬ実力や体力をもち、進学後さらに社会で就職しても秀

れた能力を發揮した者が少なくなかった。その後、高學歷化が進み、大學進學者が増加した。母校をはじめ公立高校の定員増により、近頃では高校や大學での学力低下が目立ち、さらに近年では卒業生の深刻な就職難が社會問題となつてゐる。

五十年以前の私たちの中學・高校時代は非常に幸運な時代環境に恵まれていた。勉強以外にも文化・体育系サークル活動を樂しみ、物質的にはやや厳しい時代ではあつたが、六年間にわたつて友情を育むことができ、そして五十年ぶりに逢えた友人たちと懐かしく語り合えるのである。最近のように全ての中學・高校が受験体制下におかれると勉強に関心の低い學生は學校に愛着がもてず、教師や學生相互の人間關係の形成は困難にならざるを得ない。

〈三〉 私たち一九三二年さる年生まれと同級生は、もう一年早く出生していれば戦争に駆り出された世代であり、それを免れた幸運な世代でもある。平均寿命が伸び六七、六八歳を迎えることができたが、既に四二名の同級生は亡くなつてゐる。その中には學生時代から交遊の多かった親友も少なくない。二人の友人を回想し、ご冥福を祈りたい。

平山茂君。高校時代、野球部の投手として活躍した。関西學院大學を経て、神戸港の運輸・倉庫業の大手「上組」（かみぐみ）に入社し、六十四歳まで勤めた。採用直後の試用期

間に荷役労働の作業中、数十メートル下の海面に落下して大學卒の新人社員はほとんど退職したという。彼は高度成長期に横浜支店長をつとめ、渉外關係や検疫の仕事や現場の勞務者たちの人事管理の苦勞話をよく話してくれた。母校の野球部の専用グラウンドの建設を支援する仕事も熱心に行つてゐた。会社役員任期を終え、六十三歳で退職した直後、脳出血で倒れ、六ヶ月後に亡くなつた。柏原に新築した自宅での老後の生活を樂しみにしてゐたのに。

森本保男君。勉強家で野球ほか他のスポーツも得意だつた。神戸大學を経て住友銀行に入社、労働組合の書記長時代に逢つたとき、企業年金をよく研究してゐたのに感心した。三十代半ばで大阪の難波支店長に就任した頃、全国の都市銀行のトップクラスの昇進として週刊誌でさわがれてゐた。その後、不運にも交通事故に遭い、復歸に苦勞されてゐた。系列会社の役員を経て退職してまもなく、友人との同級会の帰途、梅田の地下街で倒れ、亡くなつた。

この二人の友人は、高度經濟成長期に全力で企業人間として働き続け、役員であつたため六十五歳まで勤務し、その退職直後に急逝してゐる。本人自身が最も残念だつたにちがいない。同級生のなかでも最も精力的で勤勉だつた人が先立つという運命を、私たちは受け止めるしかないのだろうか。

# ふるさとの我が家

## 大 槻 作治郎 (市島町)

私は、昭和十二年四月、現在の市島町である前山村下鴨阪の農家に次男として生まれた。兄、姉、妹、弟がいる。家は麦わら葺き屋根で、北側の標高約三〇〇mの山裾にあった。山側の庭先には、山の清水をためた評判の飲み水用の池と洗顔や洗い物をする池があり、鯉や川魚が元気に泳いでいた。庭には古道が通っていて、昔人がよくこの水を飲んだという。村の西奥には標高六五四・六mの五台山がそびえ立っていた。祖父は宮大工で、家の中の仕事場で小さなお稲荷さんをよく作っていた。その頃は、どの家の庭先にもお稲荷さんが祀っていた。仕事場は神聖な場所として、女子供出入り禁止であった。夜は、竜などの彫り物の下絵を針で板に写していた。祖父には三姉妹の子があり、母は真ん中である。祖母はもういなかった。祖父には何故かよく叱られた。

昭和十七年頃、祖父が三姉妹の家族全員を福知山へ遊びにつれていった。そのとき三ツ丸百貨店で食べた玉子どんぶりのおいしさが今も忘れられない。おしっこを我慢している私と全員が写っている写真が今も兄の家に飾ってある。この後

祖父は家の下の道路際に自分の仕事場兼住まいの完成を前にして中風になり、しばらくして亡くなった。祖父の財産は債権で、終戦と同時に紙屑と化した。

父は六反五畝の農家で、自慢の牛を飼い、べこ(子牛)を育て、毎年開かれる市島の牛の競り市に出し、よい値段で売れたようだ。それに私もよくついて行つた。また餅米を作るのが上手で、家では何事かあるとお餅をつき、そのおいしさは近所で評判であった。秋には松茸山を入札し朝の内に松茸をよく籠いっぱいとってきた。つばみは農協へ売り、ひらきやこわれたものを焼いたり松茸ご飯にしてよく食べた。松茸の季節が終わり、山が開いた後前の山に芝刈りに行き、残り松茸の開きの大きなものを数本見つけ大喜びしたことがあった。

母は器用で何でもできた。桑畑があり家では春秋蚕を、表の間と次の間の畳をあげて飼つた。売つた繭の残りで糸を紡ぎ、祖父の作つた機織り機で布を織つた。ぼろ布を裂き普段着用の帯なども織り、近所からも頼まれて織物をした。

醬油やみそも作つた。漬け物が上手で特に長年漬けた瓜のみそ付けが自慢であった。父が酒好きのため酒が買えないときは、きほどぶろくを作り、甘酒も作つた。お菓子がないうときは、あめを作り小麦粉でせんべいや焼き餅を焼いた。かばちややら豆のあんこの焼き餅が特においしかった。うどんもよく作つ

て食べた。お寿司を作るのが上手で、魚屋が毎日自転車で魚を売りに来て何か事があると鯖すしをよく作った。家を出てから母の鯖すしよりもおいしい寿司にまだ巡りあつていない。最初の頃の思い出は、よだれかけをかけて下の家の子らとかくれんぼや庭の小さな溝で池を作り遊んだことである。四月になると、庭先の桃の花が咲き、節句には床の間に雛壇を作り、皆自分の土製のお雛さんを飾り、菱形の色餅やあられお菓子を供えた。

近所の家をまわって甘酒を飲み、お菓子を食べた。お釈迦さんの日には、上鴨阪の奥の尼寺に集まり、庵主さんの話を聞き、甘茶を飲み、餅菓子がばらまかれた。六月は男の節句で柏餅を食べた。

螢の季節がくると前山川に螢が乱舞した。川には鮎がのほり石の周りをくぐる元気に泳いでいた。秋になると川原の土手は曼珠沙華（彼岸花）の花で真っ赤に染まった。庭先の山には栗林があり、毎日栗捨いするのが日課であった。秋のおやつは、家の周りの桃にはじまり久保柿や富有柿と栗であった。冬は寒く手足にしもやけができてかゆいので、大嫌いな季節であった。

一九五三年に十五歳で丹波を離れて四十七年になり、我が家も取り壊し移転してなく、両親も亡くなったが、子供の頃が昨日の事のように思われる。

## 郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりをも、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東水上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い申し上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、『丹波のきずな』の強さを思います。

(山ざる編集部)

# 柏原高校野球部の思い出

大塚 秀 式 (氷上町)

一昨年、昨年と八月の下旬に、妻とふたりで両親の墓参に行きました。舞鶴高速道路の春日インターで降りて数分の国領温泉旅館「助七」に宿をとりました。旅館の仲居さんと雑談するなかで、柏原高校にしばらく在籍したことなど話していると、今では入学が大変な高校なのだというところで、時代が変わったことを知りました。私が入学した頃は、高校と言えば柏原高校しかなく、普通科、商業科、家庭科があったように記憶しています。

私が柏原高校に在学していたのは、昭和三十年四月から十二月までの二学期間でした。入学式の前から野球部の練習に参加し、生郷中学校の二年先輩だった岩本さん、すぐ上の池上さんに誘われて、迷わず野球部に入りました。当時の野球部は部員も少なく、決して強くなかったと思うのですが、後にトンボユニオンズ(そんなプロ球団が一時期あったのです)に入団され、その後、ノンプロでも活躍された西本さんがピッチャーでした。三年生の成松の上野さんは大人のよくな体つきで貫禄十分でした。同じ三年生でも、足立さんは

穏やかな人柄で佐治から通っていました。田原さんは柏原の人で楽しい方でしたが、ボールが口に当たり、何本か歯が折れたことがあったのを覚えています。二年生の安井さんともう一人は本当に野球が好きでした。岩本さん、池上さんは中学時代から一緒によく面倒を見てもらい、尊敬していました。

一年生では、途中で退部する者が多く、秋の新人戦まで残っていたのは、投手の前田、外野の土田、そして二塁手の私など数人だけだったように記憶しています。部長は大内先生で、温厚な先生でしたが、ほとんど練習の指導などされてなかったように思います。その代わり、マネージャーがすべての面倒をみていたように思います。彼は、一年生には相当恐れられていて、退部を申し出るときなど大変だったように思います。三年生でも有名な方だったようでした。私は幸い、可愛がって貰ったので好きでした。(それでも一度退部しようとした時など教室までバットをもって来られ、怖かったような記憶もあります。名前は萩野さんだったか松井さんだったか) それにしても個性的で、よい人(善人)の集まりでした。私の生涯でもこのような集団にはその後出会うことはなかったように思います。まさに野球馬鹿の集まりでした。よく人から聞く、体育系のうっとおしさなどなく、思い遣りのある優しい人の集団でした。

練習は、今考えると、まさに非科学的で、無茶苦茶でした。

どんなに暑くても水分補給なしで、部室内が暗くて何も見えなくなるまでやっていました。夏休み中に訪れる先輩と称する大学生の中には、遊び半分に、いじめとしか言いようのないしごきをし、部員に毛虫のように嫌われている人もいました。今も、ファールボールをとりについたバックネット後方の木陰の涼しさや、ライト後方の水田に落ちたボールを探しに、裸足で入ったときの水と泥の心地よい感触などが忘れられません。練習後、汽車で通学していた人に付き合ひ、柏原駅前の「菊水」でアイスクャンデーか掻き氷を食べるのが楽しみでした。この小さな店に同級の女生徒がいて、彼女に会

## 蛍舞うふるさと

大木千里（旧姓清水・山南町）

今年六月十七日午後四時半過ぎ、私は故郷谷川駅のホームに降り立っていました。久しぶりのなつかしい故郷の土——この度、亡き母と祖母の法事のために帰って来ました。この駅は、その昔乙女の頃に毎日通学で乗り降りしていた駅舎、今は改築されてはいますが、六十年前のあの頃の思い出が次々

うのを楽しみにしていた仲間もいたように思います。私もセンター後方で練習していたダンス部の一人に淡い恋心を抱いたこともあったように思います。

私はこの年両親と死別し、翌一月に、大阪の豊中高校へ転校し、そこでも野球部に入りましたが、このような楽しい体験は二度とありませんでした。想い出はつきないのですが、名前を出させていただいたみなさん、今、どこで何をされているのでしょうか。素晴らしい青春の一ページをありがとうございます。なお名前等、固有名詞に記憶違いがありましたら、お許し下さい。

と走馬灯のように脳裏を駆け廻ります。朝の通学時、柏中の柏女の制服の一团の賑わい、どの顔も明るく元気で屈託のない少年少女たちでした。しかし、こんな平和な中で日支事変が起こり、いよいよ緊迫の度が高まって、この駅でも出征兵士を万歳万歳で送り出すことになりました。

それからの日本は非常時体制下の生活を余儀なくされる毎日が続き、何事も勝つまではが合い言葉となりました。

あれから六十年近く過ぎて、ピチピチの乙女も今や七十五歳を迎え、思えば長いような短いような七十五年間でした。

翌日は、幸い天気予報がはずれて良いお天気となり、空の



抜けるような青さは東京の空とは透明度が違ってきます。あちこちの谷間でうぐいすがさえずり、蛙の合唱も賑やかな、それはそれはのどかな初夏の一日の始まりです。今は田舎の道路も立派になり、昔のように歩いている人や自転車の人を殆ど見かけることもなく、やはり田舎も車社会の時代と変わっているようです。昔のように道で知り合いに出会って立ち話などということも少なくなっていくのでしょうか。

夜に入り唯一期待していた蛍が九時過ぎた頃せせらぎの草陰から一匹二匹と飛び交い始めました。暗闇の中に点滅する

蛍火はまるで幽玄の世界に私をいざなってくれるようです。何十年ぶりかでの思い出との再会でした。

三日目も家の近くのあちこちを散策、田舎気分を満喫して過ごし、四日目の朝、後ろ髪を引かれる思いを抱きつつ、特急北近畿四号に乗り込みました。指定席車両は二、三人のみにて、のんびりと三日間の思い出に耽りつつも又、東京駅と池袋駅での乗り換えの雑踏のことなど思いながら、ついうとうと眠っていたようです。私はこの年齢で帰る故郷のあることに深く感謝しております。

## 氷上中学校時代の思い出

本 城 英 明 (氷上町)

昭和三十八年、私は小学校六年生であった。私が住んでいた氷上町は、東西南北の各地区と中央地区の五つの地区に分かれていた。当時中学校は、東南北のそれぞれの地区と西地区と中央地区は二地区で一つとなり、四つの箇所に分かれていた。ところが、私達が中学校へ進学する年から中央地区に新しく中学校が建ち、四つの地区で分かれていた生徒達がす

べてそこに集まるという、いわゆる統合中学校として出発するニュースが入った。またそれに加えて、これまで自由であった男子の髪型は、全員丸刈りにしなければならぬという決まりもできたと知らされた。丸刈りの髪型を継続するのか廃止にするのか後年になりずいぶん論争されるが、その出発点となる年でもあった。

昭和三十九年、私達は統合された氷上中学校へ入学した。校舎は新しくなったがグラウンド整備はまだ充分でなかったため、春の陸上競技大会は、氷上中学校から少し離れた民間会社のグラウンドで開催された。私のクラス一年五組は学年第二位となった。私は大した活躍をしなかったが、クラス役員であっ

た関係で閉会式にクラスを代表して準優勝楯を校長先生より受け取ったことを記憶している。また後日には相撲大会も陸上競技大会も行われ、個人戦に参加した私は四位に入った。

夏はプールがまだ出来ていなかったのので、水泳の時間は中学三年間を通して私達にはなかった。しかし、体育の時間には中学校のすぐそばを流れる佐治川へ行って魚を取ったことはある。校内水泳大会は小学校のプールを使用して行われた。

秋の体育祭は、ようやく整備された校内グラウンドで開かれた。開会式の入場行進は、一年生、二年生、三年生の順であったので、私達の学年は、記念すべき第一号の入場行進に参加できた。通常グラウンドのトラックは一周二百mもしくは四百



mであったが、氷上中学校の場合には一周三百mであった。

来訪者もあった。東地区出身の里選手が早稲田大学陸上部のキャプテンだったということもあり、同大学の陸上部員の来校があった。メンバーの中には東京五輪百メートル日本代表の飯島選手や聖火最終ランナー坂井選手の姿もあり、私達は大いに興奮した。同時期ではなかったが、東京五輪体操競技メダリストの来校があり、体育館では模範演技が披露された。私達は演技以上に選手の胸に輝いていたメダルに興味を向いていた。

二年生になると学校長は、荻野校長から林校長へと代った。林校長は、氷上中学校には素晴らしい校歌があるのに、明るく力強く歌われていないと嘆かれた。それで朝礼の時間やホームルームの機会に校歌の練習を行った。校長先生には申しわけなかったが、少なくとも私達の学年には効果は出なかった。三年生になると、入学試験や就職試験を控える年なので模擬テストも本格的に行われた。会場は体育館で各自が机とイスを選び入れ三年生はすべて集合して実施された。結果は四三二人中何番という順位付きで返された。私達の学年生徒数は四三〇人くらいだったことになる。

修学旅行は、東京・日光というのが従来は決まりだったようであるが、私達は箱根・東京コースとなった。今のようにな幹線が普及していなかったので修学旅行専用車だった。東

## 原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。なお、編集上以下のように分類しております。



- ①ふるさと随想▶ふるさとに関するさまざまな思い出や感想など
- ②近況・エッセイ▶旅行や趣味/世相雑感/私の近況/文芸
- ③インフォメーション▶展覧会/各種催し/同窓会/本の紹介
- ④こんなテーマの原稿も募集しています。
  - ▶ふるさと研究/ふるさとの祭り/ふるさとの民話と伝説
  - ▶わが師を語る/わが出発の時(ふるさとを離れる時)
  - ▶丹波を撮る(帰郷の際に撮ったスナップ・ふるさとでの思い出の写真)



■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。



締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成13年8月20日です。

原稿枚数：400字詰用紙4～5枚程度

送付先：〒104-0032 東京都中央区  
八丁堀1-8-2 ISビル2F  
(株)ホンゴ出版内  
『山ざる』編集部  
TEL 03-3537-6221  
FAX 03-3537-6222

海道本線沼津駅で下車し、バスで箱根へ向かいそこで一泊した。翌日は小涌谷の見物から始まった。とにかく富士山が奇麗だった。私達も外国からの観光客と一緒に「オーワンダフル」を連発した。次にバスは箱根を下って湘南へと向かった。ガイドさんが名所旧跡を話してくれるが、女生徒達のお目当ては、若大将加山雄三の家にあった。加山雄三の家を見ただけで幸せな気持ちになった女生徒も多かった。東京では宿泊場所が後樂園球場のそばだったので、希望者はプロ野球観戦に出かけた。南海―東映戦だった。三日目は東京見物。バスは

夜に入って首都高速道路を走り、銀座の通りを横切る瞬間があった。ガイドさんが「次にパッと見えるのが銀座の灯です」と言った。時間にして一秒もなかった。けれども銀座の灯は今も私の心に残っているくらいに本当に明るかった。ガイドさんが歌った曲「ああ東京の灯よいつまでも」で私達の修学旅行は終わった。

昭和四十二年三月、雪の舞う日に私達は氷上中学校を卒業した。そして平成十一年一月三日、氷上町横田にある「夢タウン」に私達の仲間約一四〇人が集まった。

# 丹波を撮る



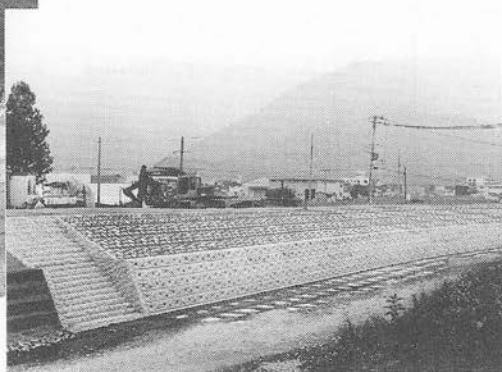
柏原川堤防決壊の翌日（柏原町提供）

## 世紀末豪雨の爪跡

（1999年9月7日）



1ヶ月後



1年後（柏原町田路にて）

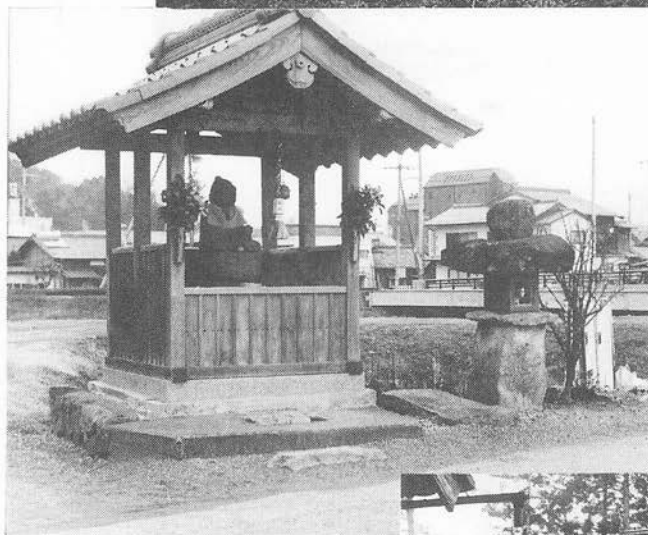


「丹波の孝女 白菊」生誕地  
（氷上町上新庄）

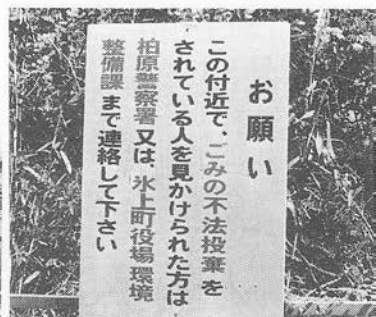
成松にも在った！  
川裾大明神の碑と灯ろう



側を流れるのは葛野川



向こうに見えるのは成松橋



丹波の言葉は丁寧だとは思っていたが、こほど丁寧だったとは……(氷上町石生にて)

風台風で倒れた  
大歳神社の棟上式  
(氷上町三方)



# 丹波を撮る



横田遺跡出現で但馬への  
高速道路工事がストップ  
(成松方面より遺跡を見る)



遺跡より成松方面を見る  
(氷上町横田にて)

# 丹波を撮る



旧葛野小学校校舎も健在です  
(氷上町新庄にて)



「水分けを歩く会」で氷上町石生水分け資料館  
に集った氷上町郷土史研究会の皆さん



ここが本州中央分水界で最も低い  
海拔95mの「峠」(石生新町にて)



民俗学者が関心を持ちそうな道祖神  
(氷上町中にて)

# 近況・エッセイ



## 教えたくないモンゴルの魅力

上 高子（永上町）

近所にモンゴル親善協会の役員をしている人がいて、あるときこんなビデオを見せてくれた。

母ラクダが突然死した。遊牧民が乳飲み子を代理乳母のラクダに近づけると、拒んで、蹴飛ばす。そこで男が隣の集落まで馬を飛ばして、やり手ばあさんと楽団を連れてきた。草原に敷いたカーペット上で馬頭琴を奏でる青年、木琴をたたく男、そしてめすラクダの体を優しく撫でながら、民謡もどきを歌うやり手ばあさん。歌声は草原を広がり行き、みるみるラクダの目に涙が溢れ始める。で、そつとこどもを股の間にくぐらせると、抵抗しないで乳を飲ませてやったのだ。それだけの話し。

これを見て、「モンゴルへ行く」と決めた。八月の下旬、二十一人のグループに入って、九日間の旅に出た。

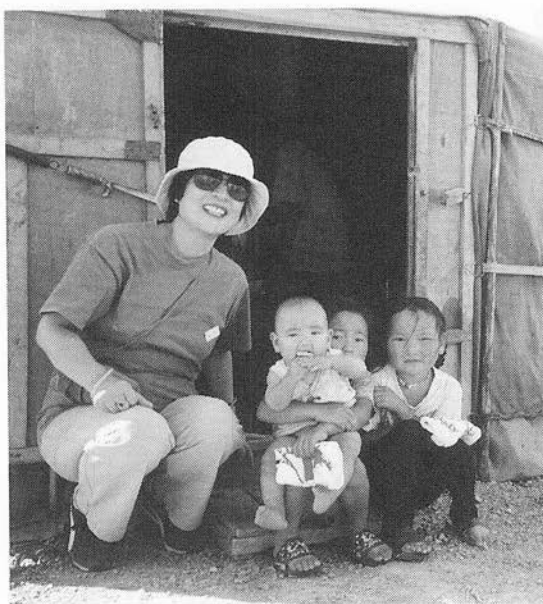
### ■なぜモンゴルへ来たの？

首都ウランバートルから、旧ソビエト製のオンボロ飛行機でゴビ砂漠へ向かった。何にもない草原に降り立つ。近くの



キャンプ用ゲルに宿泊。

見回すと三百六十度地平線、どこまでも続く草原にゲルが点々と見えるだけ。「日本に来ているモンゴル青年に絵を描かせると、まず真中にまっすぐ線を引くんですよ。天と地を分ける。実感ですなあ」と、グループの医師。中国との国境である天山山脈が南の方角にあるので、ここだけちょっと凹凸をつければよい。太陽は地平線から昇り、雲が地平線から湧き出ている。陽が沈むのも地平線、夜空の星座は地平線か



モンゴルの子供たちと筆者

ら始まっている。

夕闇に焚き火が見える。近づくくと白人のカップル。ドイツから来たそうだが。われわれに「なぜモンゴルへ？」と問う。

「ストレスの多い生活から逃れたいから」。ちよつと相手の期待におもねる答えを言った。

「そうでしょうとも。日本は休暇が年に何日取れるのか」。

「二十日。でも長い休みはなかなかとりにくいのですよ。新聞で休日の国際比較を読んだが、ドイツが一番長くて、日本はアメリカと同程度。ヨーロッパの国々より少ないそうです」。カップルは顔を見合わせて満足そうな笑みを見せた。日本人の働き蜂の評判はなかなか消えそうにない。グループの構成員はほとんど女性。女ばかりが楽しんでいる。

#### ■放牧にも資本主義の現象が

「干ばつや雪の被害で家畜がたくさん死んだという報道のせいか、今年は日本人の旅行者が急激に減っています」とガイドの説明。五年前に観光旅行が解禁になってから数年間、最高二万人にまで達した日本人は、今年四千人にまで落ち込んだそうだ。一過性の性質はここにも現れている。その分、ヨーロッパからの旅行者が増えてきたらしい。(特にドイツ人。車もドイツ製が多い。旧体制時代は旧東ドイツと友好国だったから)

人口およそ三百万人に、三千五百万頭の家畜がいて、毎年こういう被害はあるが、今年は特にひどかったそうだ。

「それは資本主義に変わったからです」。日本の国費留学生として横浜国大で学び、今はガイドをしているテングルさんが言った。

以前は政府が放牧の指導をしていて、干し草の準備もしつかりしたが、自由財産になって、ちゃんとする人と怠ける人が出てきた。家畜が国家の財産だった時は、死なすと刑罰があったという。今や均等に分配され、私有財産となった家畜は、生かすも殺すも本人の自由。もうすでに家畜を売り払って町へ流れ出ていった人も、才覚で何倍にも増やした人もいるというのだ。

#### ■「丁革命」はここにも

一転こちら首都ウランバートル。市内のあちこちに「インターネットカフェ」がある。喫茶店にパソコンが数台置いてあって、若者がたむろしている。使用料は時間制。自前のパソコンをもっている人が少ないから成り立つ商売だろう。コーヒー三杯と、およそ三十分ほど使って千トウケルグ（およそ百円）。友人達に「モンゴルからの挨拶」メールを送信した。「大学生のほとんどが携帯電話をもってます」と大学生のガイド・ザグダさんが答えた。まさか、と思ったが、全人口の

二十パーセントにあたる六十万人がウランバートルに住み、大学生はせいぜい数万人数人だろうから、ありうるかも。架設電話を張り巡らせる前に携帯だけで用が足りるようになるのだろうか。

何しろ郵便事情がひどく悪い。戸別配達がなく郵便局に私書箱を持っている人にだけ郵便物が届く。住所の定まらない遊牧民はもちろんのこと、都市の住民さえ私書箱をもたない人もいるという。情報の偏在は推して知るべし。

ところが、旅行者から情報を得るのか、日本については、ガイドの話しから察するところ結構知識がある。

「日本人男性と結婚することは憧れではない」と言ったとき、ここまでステレオタイプがすすんでいるのか、と驚いた。

「私は子供がいても、家族が交代で世話してくれるから、縛られないで働けます。でも日本人と結婚したら子供に縛られるでしょ」。

#### ■文化の復興がさかん

ロシア革命に続いて社会主義体制になったとき、ロシアの文化がモンゴルを席捲するようになった。

串団子を立てたようなモンゴル文字は、一九四六年、ロシア語と同じキリル文字に変えられた。アルファベットの垂流みたいな、あれ。モンゴル語の音韻を無理なくカバーしたの

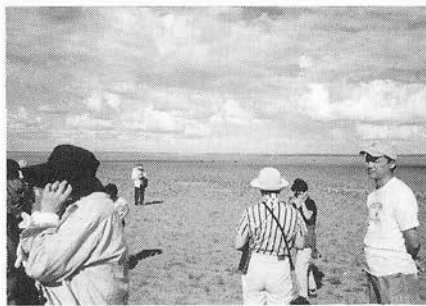
ですんなり置き換えられ、モンゴル文字はすたれた。

今さかんにモンゴル文字を復興しようとしているが、うまくいってないようだ。土産屋で二千トウグルグ（二百円）を払って、串団子文字の名前を書いてもらった。半紙に墨と筆で縦書きに書く。お習字そっくり。

旧ソ連の崩壊までは、ロシア語が中・高等学校で六年間教えられていた。「学校にロシア人の先生がいました。私は外国語大学へトップの成績で入ったので、自動的にロシア語科へ配置されましたが、民主化が実現したばかりの一九九二年だったので、ロシア語の将来はないと思って学校を辞め、日本語学校で勉強をはじめました」とザグダさんが言う。その

ままロシア語を専攻した人は、就職がうまくいかなかったそうだ。

日本語はモンゴル語と同じウラル・アルタイ語族に属し、文法が似ているので習得が容易だという。ザグダさんは秋から大学の日本語科三年生になるが、日本語はほぼ完璧、他の二人のガイドも短期間に日本語を習得し流暢だ。



食事にはナイフとフォークが出されるが、もとはお箸を使っていたらしい。宗教もチベット仏教が国教だったが禁止された。もう、元の状態にもどることはないだろう。

「日本では戦後、アメリカの進駐軍によって伝統文化が無理に廃止されなかったことは、今思うとよかったわね」とグループのひとりのおばさんが言った。

#### ■馬から落ちて落馬した

今回の旅行では馬に乗ることが一番楽しみだった。そして堪能した。

椎名誠の小説に、モンゴルで乗馬をすると、日本ではあほらしくて乗れないというようなことが書いてあるそうだ。私も会社員だったころ、乗馬クラブに所属していたことがあって、合宿で馬に乗せてもらうまで何日かかったことか。服装のこと、マナーのこと、講釈が長く、やっと乗れてもたずなを引かれて馬場をグルグル回るだけ。

ここではどうだ。馬の後ろに近づいてはいけない。乗るときは左の腹側から。たずなの持ち方、これだけ言うと、二分を待たず、すぐ草原を歩きます。ウランバートルの郊外にあり、もとは旧ソ連軍の将校達のリゾート地だったここは、丘陵地帯の快適な馬場だ。初心者のおばさんでさえ、キャンプ二日目にして一日六時間のトレッキングに出た。そして魅力

にはまってしまった。

「馬一頭買うのに日本円で二万円？一年に一週間だけ乗りに来て、日本で乗るよりずっと安いし楽しいわね。『モンゴルに馬持つてるのよ』って格好いいじゃない？」

モンゴルの馬は背が低い、というより脚が短い。「サラブレッドみたいに瞬発力はないけど、持久力がある」とモンゴル人は誇らしげに言う。つまり人間もそうだよ、ということ。

私の馬はまだ若かったらしい。すぐ草を食べ始めるし、おしっこタイムもとる。何回腹をけても知らん顔している。けど、後ろから馬主が「チョー」と掛け声をあげながら近づくときと突然走り出す。そのときも早足で丘の頂上を目指していた。前を行く青年の野球帽が風で飛んだ。「あっ、帽子が」と、私は振り向きざまにバランスをくずし、もんどり打って落ちてしまった。

実はお尻が腫れて痛かったが、もう乗るなど言われるのがいやで誰にも言わず、平気を装って乗りつづけた。落馬のせいだけではない。したたか鞍に打ちつけた尾てい骨は、ずつと痛んでいた。それでも馬で野山を行く気分は、この上なく爽快。「毎年来たい」と思ったほどだ。

## ■私のルーツ

帰国してそっと合わせ鏡で見ると、お尻に赤ん坊の「蒙古

斑」のように、あざが青黒く広がっている。その時確信した。「これは騎馬民族の印。『蒙古斑』は鞍に打ちつけ続けて青くなった部分が遺伝子として受け継がれてきたのに違いない」。早速、モンゴル通の近所の人に電話した。「騎馬民族でも中央アジアの人種は、あのあざがないんですよ。モンゴル人と韓国人と日本人、それに南米のインディオにはあるんですけどね」。

うーん。仮説をもう一つ。蒙古人種は硬い鞍に乗っていた。きつとそうだ。ヒトゲノムの解読が進み、遺伝子のことがかつてくると、私の仮説も証明されるかも。

テレビのCMで「人間は五百万年生きてきた」とナレーションつきのモンゴル草原の場面を見ると、気分がよくなる。馬が草原を疾走するところを見るとワクワクする。この私に、騎馬民族の遺伝子が濃く残っていることがDNAで科学的に証明されるまでは生きていたい。

モンゴルの魅力はあまり人に教えたくない。せっかく減り出した日本人が、またどっと増えるのはうれしくない。「モンゴルに馬一頭持っている」(まだ実行に移せないけど)と言っても珍しくなくなればつまらない。だからこの話はここだけにして欲しい。

## 後ろ向き歩行のこと

井 本 義 一 (柏原町)

今年の年賀状に「道を選んで後ろ向きジョギングを楽しんでいます」と近況報告してたら、同期のN君から、「何故?」と聞かれたので、以下その回答の要約を記して、本誌への原稿参加の責めを全うしたいと思えますので、ご笑読下さい。

△先日のパーティー時には話が途切れて失礼。第一の理由は以前から第二の“心臓”というべき足は鍛えてきたつもりですが、介護手帳所持者の所為でしょうか、昨年の初めあたりから、上り坂をきつく感じるようになり、考えた挙句、足の後ろ側の筋肉も鍛えようと思立って、この後ろ向き歩行を平成十一年夏から実行したところ、私にとって坂一杯の多摩丘陵ですが、随分楽になったと体験的に感じている昨今です。ゴルフを止めてから久しいですが、特に夏などあの苦しい砲台グリーンの上りも必ずや楽になると思います。

第二点は後ろ向きですから緊張感があつて、これが運動のメリハリというのでしょうか、私にとっては若さを保つ刺激となつて良いのです。また力を抜くというコツを会得すると、

馴れるに従いスピードが増してくるのも嬉しいことです。早朝の路上2・5kmのうち、約2kmを後ろ向き歩行に当て、一方、日曜日を除いて毎日通っている会員制スポーツクラブのプールで、水中後ろ向き歩行には約十五分間を励行しています。

第三点は逆転の発想と言いますか、道を行く犬から猫までもが振り返って見送ってくれる面白さ、また、進むに従って遠ざかりゆく景色、家並み、人、ペット等々を見るのは丁度映画監督になったようで、“いとおかし”の感じを満喫しています。自分の足で歩き出してからこの年まで、ほぼ百パーセント前進しての近づく映像ばかりを見慣れてきたのですから。ひるがえつて、自分の過ぎ去りしあの時、あの場所での人生の様々な“風景”とダブらせて観るのも楽しみなものです。

第四点、私はぜんぜん知らなかったことで何気なくやり出したこの後ろ向き歩行の選手権大会があるというのを、(私のやっているのを見られた)近所の旧職場の先輩から聞いて世の中には色々なレースがあるものだなとビックリしています。

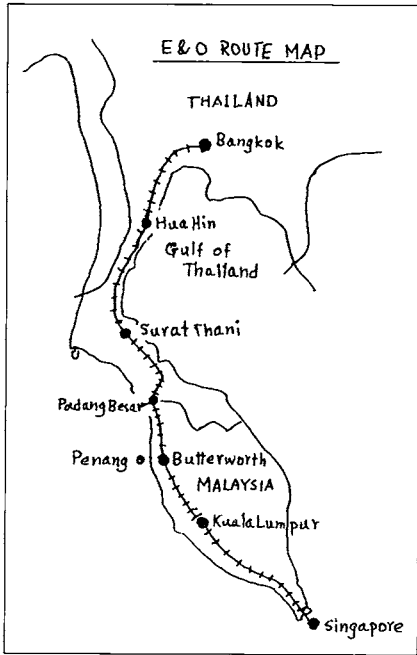
それでは次回のお会いまでご自愛ください。お元気で!!

(12・4・19記)

# オリエント急行マレー半島の旅

生田清弘（柏原町）

この間、久し振りに友人に会ったら、「オリエント急行でバンコクからシンガポールまで旅をして来た」と言っていた。以前に私からオリエント急行の話聞いて、折りがあつたら乗ってみたかったというのだ。私も彼の話聞いてるうちに旅をした時の思い出がなつかしく甦り、ここに拙文をお届けする次第である。



今から一七年前の一八八三年一〇月四日、一連の長距離列車がパリを出発しコンスタンチノーブル（現在のイスタンブール）へ向った。それがベニス・シンブロン・オリエント・エクスプレス（V S O E）の始まりだった。この画期的な長距離列車は、室内の設備、調度品から食事、サービスに至るまですべてが超一流で豪華この上なく、あつという間にヨーロッパの社交界の話題をさらった。

イギリスを走るプルマン車は、オリエント急行を創設したジョルジュ・ナヘルマッカーズに大きな影響を与えたと言われるが、アメリカのプルマン・カー社が一八八〇年頃イギリスに進出して建造した豪華車両である。

イギリスの様々な歴史的行事に使用されたこれらのプルマン車がイギリスの誇る古城巡りや、郊外の美しい街や村を走り、最も人気の高い競馬「ロイヤル・アスコット」を観戦するツアーなどにも利用されるようになったという。

その後、二度にわたる大戦の影響と航空機の発達による旅のスピード化にあおられ、鉄道も幾多の紆余曲折の時代を迎えたが、この伝統ある「貴婦人」は不死鳥の如く甦る時が来たのである。つまり、「V S O E」は車両については昔と同じ豪華な内装を再現し、細部まで行き届いたサービスを提供し素晴らしい列車の旅を用意して、利用する人々を魅了し感

動を与えている。ロンドンのビクトリア駅からパリ、チューリッヒ、インスブルックを経てベニスを結ぶ代表的なルートと、年度によりデュッセルドルフからケルン、フランクフルトを経てベニスに至るドイツ・ルートも開いている。

この伝統に輝くオリエント・エクスプレスが一九九三年九月に、バンコク、クアラルンプールおよびシンガポールを結ぶアジア版オリエント急行を登場させた。即ちタイ、マレーシア、シンガポールの三国をつなぐマレー半島縦断の国際列車による全行程一九四三キロメートル、所要時間約四一時間（二泊三日）の旅だ。車両はスリーピング・カー一二両、レストラン・カー二両と、バー・カー、サロン・カーおよびオブザベーション・カーが各一両、それにスタッフ・カーが二両、動力／ラゲッジ・カーおよび機関車の二一両編成である。私がかねてヨーロッパでオリエント急行の旅を試みたかったが、いつも日程の都合で噛み合わず実現しなかった。今回は仕事を離れた身で車中で二泊という余裕ある時間をとり他のことは一切忘れて、この「ナローゲージ（狭軌鉄道）の貴婦人」と呼ばれる列車の贅沢な旅を満喫したいと思立った。

○

私達は九月八日、一五時三〇分シンガポール・ケペルロード駅発の北行列車を予約していた。プラットホームにはスタッフフが整列して出迎えてくれた。グリーンとクリーム色の車体

には「E&O」の文字とマレーのシンボルである虎が描かれたエンブレムが輝き一際映えてノーブルな感じの漂う雰囲気

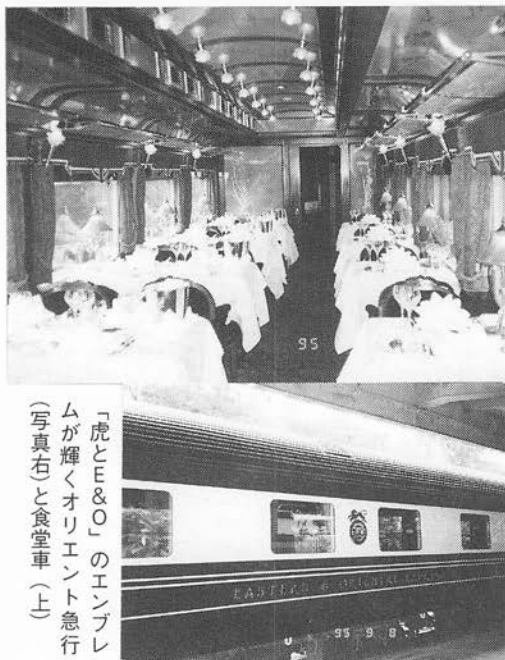
に包まれる。  
チェック・インを済ませ、荷物はスルー・ラゲッジとキャビン・ラゲッジに分け前者はそのままラゲッジ・カーへ、後者は後程キャビンに運んでくれる。この列車は通過する国毎に出入国の審査が必要だが、乗車後はスチュワードにパスポートを預けておくと、その都度自ら手続きを行う必要はなく、下車駅に近付くとパスポートを返してくれるので面倒がなく、かつ安全だ。

発車して間もなくマレー半島の玄関口であるジョホールバルの鉄橋を渡りマレーシアに入ると、車窓には椰子の木やゴムの植林が次々と流れていく。車内ではアフタヌーン・ティーのサービスがあり、車両専属のスチュワードが「今日は、私はプラチャクと申します。ようこそイースタン・オリエンタル・エクスプレスをご利用下さいましてありがとうございます」と挨拶して慣れた手捌きでティーセットを運んで来た。そして「ご用の節はこのボタンを押して下さい」と告げて部屋を出て行ったが、大変訓練の行き届いたマナーで好感のもてる青年だった。

ここで客室について触れておこう。客室は三つのタイプがあり、いずれもシャワー、トイレ付きで自室で調節できるエ

アコンが完備。ベッドは日中はソファとして使用する。スタンダード・キャビンは五・八平方メートルで、上下に分かれた二段ベッド、ステイト・キャビンは七・八平方メートルでやや幅広のシングルベッド二台、プレジデンスシャル・スイートは一・六平方メートルでシングルベッド二台に加え、ドレスルーム、CDプレーヤー、ミニバーの設備がある。

列車内は、さすがに「VSOE」を手掛けた設計技師が担当した内装だけに細部まで気配りされた造りになっている。内部は全体的に複雑に入り組んだ寄木細工や繊細な彫刻を施



「虎とE&O」のエンブレムが輝くオリエント急行  
(写真右)と食堂車(上)

したガラス細工など東南アジアのお国柄を表現した独特の伝統を生かした装飾が目を引く。私達はステイト・キャビンに落ち着いたが、列車は走るホテルと考えてよくキャビンはあらゆる騒音から隔離され、それぞれのプライバシーが保たれ狭いながらもゆっくりくつろげる内容だ。

夕食まで多少時間があつたのでサロン・カーまで行ってみた。列車の狭くて長く続く通路を通り抜け、やっとサロン・カーに辿りつく。通路では行き交う他の乗客と譲り合いながら進むが、確かに列車は豪華だが線路は狭軌で古いためかスピードを落とし平均時速は約六〇キロメートルという。それでも列車の揺れは激しいと言わざるを得ない。サロン・カーでは図書室で読書を楽しんだり、ブティックではロゴマークをデザインしたオリエント・エクスプレスのコレクション・グッズを販売していた。

レストラン・カーの客席はファースト・シートイングとセカンド・シートイングに分けられ、いわゆる早番か遅番かを選択できるようになっていて、私達は遅番だった。そろそろ遅番の時間が迫ってきたのでサロンで食前酒を飲みながら待つとレストランへの案内が始まった。既に客席は半数以上が乗客で占められ、男性はスーツにネクタイが殆ど、女性はそれぞれ個性豊かな服装で恰もファッションを競うかのようだが、本場ヨーロッパのオリエント・エクスプレスほどのき





ジャングルの中を走る（展望車より）

らびやかさはなく、格式張らず窮屈さもないようだ。その場のムードを大切に楽しく食事をするのだから、礼を失しない範囲であまりかしこまらずに過せるのがよいと思う。

ワイングラスを傾けながら互いに談笑している光景は、それ自体が列車を忘れさせる高級レストランの雰囲気であり、改めて室内の調度、装飾、照明、食器に至るまでがよく調和していると思った。食事が終る頃、スタッフが客席をまわり「今晚の食事はいかがでしたか。何かお気付きのことはございませんか」と尋ねた。客をもてなすという原点に立って意見を聞きながら改善に資するプロの姿勢を垣間見た思いだった。

いつの間にか時は流れマレーシアの首都クアラルンプールに到着。二三時前のほぼ予定通りの時間だ。クアラルンプール中央駅はアラビア様式の優雅な建物で美しいアーチの曲線と繊細なミナレット（尖塔）をもつ白亜の外観はまるで宮殿のようだという。夜間のためその全容を見極めること

ができず残念に思ったが、異国情緒の漂う駅が印象的だった。キャビンに戻る途中バー・カーを通るが、ここも食事を終えた乗客で満席に近くなかなかの盛況で、ピアノの生演奏を聞きながら三々五々グラスを傾け話が弾んでいるようだ。外国人はムードを大切にするので最高に気分を盛りあげているようにも見える。この状態があと暫くは続くことだろう。

○

二日目の朝は目覚めると高床式の家々や、水を豊かにたたえた水田や水牛など、のどかな風景が展開していた。六時頃、例の細長い通路を幾つも通り抜け最後尾の展望車に行った。オーブンデッキからの眺めは広々とした視界が開け朝の澄みきった風は爽快で、本心に心が洗われるようなすがすがしさだ。都市の家々の密集した風景と異なり、熱帯らしいジャングルの木々が線路脇に続く。説明によると、森を飛びまわる色鮮やかな熱帯の野鳥を見かけたり、ジャングルに響き渡る虎の声を耳にすることもあるらしくエキゾチックな自然を身近に感じることができると言う。

ゆつくり眺めを楽しみキャビンに戻ると、ベッドはソファに仕立てられていて間もなく朝食が運ばれた。プラチャク君は爽やかな笑顔で挨拶を交わしたが、こんな時には客とスタッフのコミュニケーションが大切で、旅を楽しくするかもしれないもちよつとしたお互いの気配り次第。そんなことを考えなが

ら新鮮なフルーツジュースを飲んだ。

やがて列車は定刻の九時三〇分にバターワースに着いた。

長旅の気分転換のためベナン・エクスカーションが組まれているのだ。マラッカ海峡に浮ぶベナン島の中心、ジョージタウンへの約二時間ばかりの遠足。駅では賑やかなチャイニーズ・ライオン・ダンスに迎えられ改札を通り、待ち受けた専用バスに乗りフェリーにてベナン島へ向う。白く輝く海岸線は美しく鮮やかな緑の映える島は、「東洋の真珠」とも、「インド洋のエメラルド」ともいわれ南国情緒の豊かな島で、今やアジア屈指の高級リゾート地である。島の玄関口、ジョージタウンはクアラランプールに次いで観光客を集め、かつてイギリスの海峡植民地として栄え、独立後も東西の交通の要衝として発展している港町。交易品とともに、いろいろな民族や文化が流れ込み、それぞれの特徴あるコロニアル調の市庁舎をはじめ、アラビア風のモスク、さらびやかなヒンズー寺院、あるいは中国寺院などが格別の違和感もなくうまく融合している街だ。ジョージタウンのランドマーク、六五階建てのコムター・タワーから北に向うベナン通りはこの街の中心。世界の名品からマレーシアの特産品まで数多くの商品が街中に溢れ、人気の高い錫製品（ピューター）や、手頃な値段の金製品の店が並ぶ。



町中を行く「トライショー」

バスは一〇時半頃、植民地時代の面影を残す「E&O」ホテルに着いた。ホテル前には「トライショー」と呼ぶホテル専属の輪タクが沢山待機していた。三輪車の前方に二人乗りの座席を設けた人力車だが、あまり広くない地域に観光スポットが集中しているこの街では大変便利な乗り物。座席に腰掛けると、そこは心得たもので運転者が愛想よく迎え、カメラを受けとり妻とのツーショットをパチリとおさめてくれた。オリエント・エクスプレスの客はすべて同じコースを案内されるので、大勢の客が「E&O」のマーク入りの日傘をたてたトライショーを連ねて街を走る姿は壮観だ。混雑する道路をタクシーやバスに交じり器用にくぐり抜けていく。歴史的建造物の多い中、要所所で様々な宗教の古い寺院や教会、風物を説明してくれる。トライショーの終着はフェリー・ターミナルで、ここで再びバスに乗り、海を渡りバターワースに着く。朝、到着した時と同様チャイニーズ・ライオン・ダンスに送られオリエ

ント・エクスプレスに乗車。

列車は一二時ちょうどに発車、暫くはたんぼや植林のある風景が続き、レストラン・カーでランチをとり終る頃にはマレーシアとタイの国境であるパダン・ベサーールに停車。スチュワードがドアをノックして、「只今、国境を通過しますので時計を調整して下さい」と告げた。この辺りから列車は向きを変え、今まで走って来たマレー半島の西側から東側寄りに進み、ハジャイを経てスラ・タニ辺りからタイ湾の湾岸沿いを走るが、次第に夜を迎えるので十分景色を楽しむことはできなかつた。

再び車内で迎えた朝は三日目。車窓には今までの風景と異なり広大なタイの田園が開け、通過する駅々には、これから旅に出かけるのだろうか家族連れと思われる人々が大きな荷物を持ち列車の到着を待っていた。駅を除けばあたりはたんぼ又たんぼである。日本でも輸入米で話題になったタイ米もおそらくこの辺りで収穫されたものだろうと思ひながら眺めていた。と、突然子供達が手を振りながら列車を追いかけてくる光景が映った。よく見るとあちらにもこちらにも数人ずつの子供がいるではないか。私達もそれに応えて大きく力いっぱい手を振っていた。真に平和な、のどかな、暖かい情景だつた。

バンコクに近づいた頃、スチュワードが丁寧に預かつたバ

スポートを確かめながら手渡ししてくれた。私達は彼に、暖かい親切なもてなしに心から感謝していることを告げると、無事役目を終えた安堵からか、嬉しそうな顔をして両手を合わせた。

かくて、走り続けた二〇〇〇キロの旅は終着バンコク・フアランポン駅に九時四五分到着し終つたのである。プラットホームに降りたち改札へ向う途中、列車のスタッフ一同が見送る中にブティックでショッピングの際応接してくれた女性がスチュワードス姿で笑みを浮かべながら手を振っていた。まさに乗客同士も、客も、スタッフも文字通り国境を越えて同じ列車で二泊三日を過ぎた仲のいい友達になつていて、ことを実感するとともに、このような状況の続く限り世界は平和だと思つた。

○

この列車行にはペナンへのエクスカーションのほか最近もう一つのエクスカーションが組み込まれている。それは映画「戦場にかける橋」の舞台となつた「クワイ川鉄橋」(カンチャナブリ)を訪れるものである。

また、一九九七年一月からバンコク・ピサヌローク・チェンマイの間を走る路線が新たに開設されたと聞いている。このツアーではピサヌロークでスコータイ観光もセットになっているようだ。序でながら旅情報として付記しておく。

## 留学の副産物

吉田勇司(市島町)

今から三十五年前、柏原高校三年在学中に米國ケントメリディアン高校に留学した時、次の三つのことが強く心に残りました。帰国後の人生に大きな影響を及ぼしました。

その一は、何故だか分からないのですが、学校の友達やまわりの人達に宣言した、将来英語以外にドイツ語、フランス語、スペイン語そして中国語をマスターするということでした。同じ留学生の後輩には、驚くことに留学中に英語のみならず、スペイン語をマスターした者もいました。しかし、普通では私のように、一年間の留学では、やっと英語の入りに立った位で帰って来てしまうのが落ちです。

また、帰って来て英語に触れなければ、ほとんど忘れてしまうのが普通です。私は、とつてもラッキーなことに、帰国後母親の伝手で入社した日本の会社の関係で、その一年後に今の外資系企業に入社出来たことです。

私の勤める会社はドイツの会社ですが、日頃は英語で事足ります。しかし、何かあるとやはりドイツ語を必要とします。特に、会社が所有する本社研修所に世界から社員が集まっ

て来た時、ドイツ系アメリカ人や、ドイツ語を流暢に操る多くの社員は、一緒に食事したり、飲んだりして話す時は、往々にしてドイツ語で会話が進みます。

こんな時、話せない自分は置いてきぼりを食った気がして、悔しい思いをしたものです。この時、アメリカで宣言した5か国語のことを思い出し、それから四年間独学で勉強しましたが、結局日本で仕事しながら言葉をマスターするのは無理と判断し、会社を休職してドイツに半年留学しました。お陰で今は宣言した5か国語のうち、英語・ドイツ語の三か国語は何とか話せるようになりました。

飛行機に乗った時など、こちらが英語を理解するか分からず、緊張した感じでドイツ人乗務員が英語で話しかけてきますが、ドイツ語で答えると相手の顔がパツと明るくなり、以後の一〇時間近くは楽しく旅が出来ます。

何もなければ、自分は後九年で定年退職になります。退職後は東洋医学に進みたいと思っています。特に気功を身につけたいので、三か国目の中国語に挑戦する予定ですが、多分その時は中国に何か月か住むことを考えるつもりです。

特に言葉はその国で憶えるのが一番です。結婚前の若い社会人の方々には、冒険をして外国語をマスターすることをお勧めします。特に、その国で勉強することを。しかし、行く前には必ず十分な準備もお忘れなく。事前の準備なくして簡

単に話せるようにはならないと言うのが、私が学んだ大切なポイントです。

その二は、自分は日本の武道等日本の伝統・文化的なものを何一つ身につけておらず、「柔道やったことある?」「茶道は?」等質問されると、お手上げでした。帰国後はずっと、日本の武道をやってみたくて思っていました。しかしながら、空港で勤務していた関係で、夜勤などがあり、なかなか決心がつかず、一度は柔道も始めましたが肌に合わず、足を骨折して半年で止めてしまい、ずるずると来ていました。

現在の東京支社に転動してから十年位たったある年、会社の研修で三週間ドイツに滞在し、食べては寝るの運動不足から、一挙に七キロ程太ってしまい、背広を着られなくなったのをきっかけに、九〇年五月から合気道を始めました。

今では合気道のほか、居合道・柔拳法（古流空手）・杖道も少しずつ習っています。現在週二回仕事を六時に切り上げ、道場に通い、これらを習っており、また、その内の週一回木曜日は合気道を教える立場にあります。指導者のランクには初伝・中伝・上伝・奥伝、そして皆伝の五段階ありますが、現在は初伝教範で、この四月からは中伝の研修を受けています。合気道自体を始めたのが四十一歳からなので、先ず時間的に奥伝・皆伝まで行くのは無理だと思っています。

とにかく、現在目指すのは上伝師範、中伝では副審までで

すが、上伝になれば主審が出来るようになり、道場を開くことも出来ます。そんな訳で、年五回日曜・祝日にある段審査には皆勤、その他の各種大会にも出席し、審判の腕を磨く今日この頃です。会社では小人数で大変忙しくしています。週三回、アフターファイブで汗を流すことのでかなりのフラストレーションが解消されています。運動不足になっている方、今からでも決して遅くありません。ストレス解消に武道は良いものです。

柏原高校が、未だ海外旅行も今ほど身近でない時期に与えてくれた留学という贈り物に、感謝しても感謝しきれない思いで、毎日頑張ることにしています。



## 日本海不審船事件と「山ざる」

久保良雄（山南町）

いささか旧聞に属するが（だからこそ、かなりのことが書けるようになったとも言えるのであるが）、一九九九年三月二十三日、日本国中に大きな衝撃を与えた日本海における北朝鮮工作船事件が起きた。そのとき、その渦中の、ほぼ中心に一匹の「山ざる」がいた。

### 不審船現る

世の中の動きは速く、人々の関心事も次々に移り変わる。だから、この事件についても、もはや記憶がかなり薄れてしまっていることであろう。それで、事件の概要をおさらいしつつ話を進めようと思う。事件は、終わった後も長く尾を引き、それを契機に日本の危機管理のあり方が根本的に問い直され、種々な対策が行われるなど、その後の政府の政策全体に大きな影響を与えたのであるが、事件自体は一日限りのものであった。すなわち、その日の午前中、能登半島沖と佐渡沖を徘徊する二隻の不審な漁船が海上自衛隊の哨戒機によって発見された。日本漁船を擬してはいたが、漁具等を積んで

いる形跡がなく、代わりにやたらとたくさんのアンテナを立てていた。連絡を受けた海上保安庁では、その船名に相当する漁船の船籍等を調査したところ、一隻はもはや登録が抹消され、もう一隻については同じ名前の船が他の場所で合法的に操業していることが判明した。

他の状況も併せ、不審船は北朝鮮の工作船であることが推定され、以後、海上自衛隊の護衛艦「はるな」、「みょうこう」と、海上保安庁の航空機が両船の動向を見守る一方、近くにいた海上保安庁の巡視船を現場海域に急遽向かわせた。不審船は、外国の船であるとすると、領海侵犯していたことは事実であった。しかし、単に外国の領海を航海するだけなら無害通航といって国際法違反には当たらない。漁具を積んでいないのだから、不法操業していたとも言えない。だけれども、日本の領海内にいた以上、海上保安庁は停船させ検問することはできる。自衛隊はこの時点ではもちろん手を出すわけにはいかない。

海上保安庁は巡視船が到着するまでの間、航空機から停船を呼びかけた。しかし応じる気配は更々ない。そうなると、海上保安庁は強硬手段をとることもできるのである。必要であれば銃撃して、相手船を航行不能にすることもできるのである。巡視船の到着を待ってそれを実行するかどうかが真剣に検討され始めた。

## 第九管区海上保安本部

能登半島沖や佐渡沖というところは、海上保安庁では、新潟市に本部のある第九管区海上保安本部の管轄海域である。

したがって、巡視船にその現場海域へ向かわせる命令を出したり、強硬手段に訴えるかどうかを決定するのも同管区の責任であった。当時、本部長は若男登という人で、海上保安大 schools 卒のシーマン系の幹部（主として現場の指揮を執る現場経験の豊かな幹部を、中央において企画立案などに携わる事務系の幹部と対比してこのように呼んでいる）であった。

そしてナンバー2たる次長は、「山ざる」こと筆者であった。



た。私はシーマンでもなければ事務系幹部でもない、保安庁内では技術学士と呼ばれ、亜流中の亜流の、同庁の主要な業務では普通決して表に出ることのない種類の人間であった。

私と同類の職種は、通常は水路部という、海図を作ることなどを主な任務とする部において、海上保安業務の基礎資料などを生成するといった地味な仕事を行っている。ただ、一人二人は勉強のためと称して、かなりの年配に達してから、管区本部等の現場に短期間出向させられることがある。

たまたま、そういう時期に私は当たっていたのである。それも、三年間の任務を終えて、四月からは東京の水路部に戻る内命まで受け、転勤寸前の三月末の出来事であった。

## 追跡

事が重大なだけに、いくら管区の責任といっても管区だけで決められる話ではない。というのは、海上保安庁は警察官庁として、武器を使用することは許されているし、巡視船には小さいながら機関砲も搭載されていて日頃から訓練も行っている。管区本部長の裁断で銃や砲を発射することはできないことになっている。しかしながら、小銃の使用はともかく、機関砲の実使用となると、この四十六年間行われたことがなかったのである。

前回の使用と云えば、海上保安庁の草創期、というよりも日本全体がまだ戦後の混乱期を完全には脱していない時代のことだったのである。自衛隊についてはなおさらのこと、実戦における射撃の経験はもちろん一度もなかった。

ということ、東京霞ヶ関の本庁とは緊密に連絡を取りながら対策を検討した。が、本庁にとってさえも、自分だけで決定するには事が大き過ぎる。結局、運輸大臣にまで話が上った末、必要ならば撃つてもよいということが事前に了承された。しかしながら、いつ撃つか、そのタイミングとなると、いちいち東京に諮っている時間的ゆとりはない。管区本部、すなわち本部長の判断ということになる。

やがて、巡視船が現場海域に到着した。そのうちの一隻は九州の第七管区所属の「ちくぜん」というヘリコプター搭載の大型巡視船であった。「ちくぜん」は日本海の真ん中あたりを哨戒していて、比較的現場近くにいたのである。このような場合、管区の枠を超えて最寄りの船が派遣され、その船は当該海域を担当する管区の指揮下に入る。そのほか新潟、直江津、七尾などからも中型、小型巡視船が相次いで現場に到着した。

このように複数もの巡視船が現場海域に到着することが可能だったのも、実はこのとき不審船はまだスピードを上げず、のらりくらりとした行動をとっていたのである。

このとき、どれかの巡視船が不審船に銃撃を加え、危害を与えていれば、後に一部の人達からは大いに賞賛されることになったかも知れない。しかし、管区本部としては極めて慎重に事を進めた。発砲するからには、後で、真に発砲せざる

を得なかったかどうか、そのときの状況が事細かに問われることは必至であった。本部長は発砲できるとはされているものの、それにはいろいろと厳しい条件が付くのである。人を死なせてもしようものなら、その場合の事後処理の大変さたるや想像に難くない。この時点では、対応が生ぬるかったというような批判が、後に出るかも知れないなどと考える余裕はほとんどなかったと言える。

### 歴史的砲撃

もう、夜に入っていた。不審船は北に針路を取っていた。巡視船はあまり遠くないところから追跡していた。自衛隊の護衛艦も昼間からずっと不審船につけていた。

やがて、二隻の不審船はスピードを猛烈に上げ始めた。実は、このことを我々は予想していた。ある程度まで北朝鮮に近づいて、もはや燃料切れの心配がなくなったところで彼らはきつとスピードを上げると見ていた。果たせるかなそうだった。そして、そのときが射撃のチャンスだと考えていた。相手が我々の制止を振り切って逃げ始めたとなると撃つ名目が立つわけである。

本部長以下、関係者はみな昼間からオペレーション・ルームに詰めたままであった。このオペレーション・ルームというのは、通信の運用室も一緒になっていて、巡視船等との交



信はすべてここから行われる。午後八時頃、「撃て」と本部長が命令を出した。しかし、それに続いて直ちに射撃が行われたわけではなかった。実際の発砲までにはかなりの時間を要した。いろいろな事情が絡んでのことであったが、その間の時間は大変長く感じられた。特に、命令を発した本部長は苛立ちを隠さなかった。しかし、とにかく、先ず「ちくぜん」により、続いて他の巡視船艇によっても機銃が発射された。

実施したのは威嚇射撃であった。それ以上のことを行う程にはまだ機は熟していないと思われたのである。しかし、命令から実際の発射までに時間がかかり、その間、相手船の脚は速かったので見る見る引き離され、発砲したときにはだいぶ距離があいていた。したがって、威嚇射撃なのか船を狙っての射撃なのか実際問題としては区別が付かない状態だった。が、あくまで名目上は威嚇射撃を行ったのである。海上保安庁四十六年ぶりの機関砲の実射撃であった。

### 海上警備行動の発令

不番船の最大速度は四十ノット(時速七十四キロ)と推定され、一方巡視船の速度はせいぜい三十ノットであった(もう少し速い巡視船もあることはある。さらに、この事件を機に不番船に対抗できる速度の巡視船が整備されつつある)から、巡視船での追跡は間もなく不可能となり、断念せざるを得

得なかった。

一方、護衛艦はもっとスピードがあった。護衛艦による追跡は続き、それは自衛隊の歴史上初の海上警備行動の発令へとつながり事態は急激な展開を見せた。護衛艦からの射撃も行われ、航空機から爆弾も投下された。我々は自衛隊がそこまでやるとは思ってもいなかった。護衛艦には一日中ずっと支援してもらっていたが、自衛隊自身は行動に出られないはずなのを、我々は少し気の毒な思いで見ているのである。

護衛艦、航空機は防空識別圏と呼ばれる境界線まで追跡をしたが、そこから先へは進むことができず、現場の事件としては、そこでほとんどが終わった。そして、その後の世間の関心は自衛隊の海上警備行動発令の是非等へと焦点が移った。結果的には、だから、我々のその夜の行動があまり細かく検証されるということはなくなって、いろいろと慎重を期したことも半ば徒労に終わることとなった。海上保安庁の陰もすっかり薄くなった感があった。しかし、我々があのとき撃たなかったら、その後の海上警備行動の発令は果たしてあっただろうか、と私は思う。少なくとも、それによって発令が非常に容易になったことは事実であろう。

### 山ざるの立場

以上が、事件およびそれに直接対応した第九管区海上保安

本部の状況の一部始終である。しからば、そのとき、次長であった「山ざる」は何をしていたのか、何か役割を果たしたのか、次にはそれが問われなければならないまい。

次長というポストはどこにおいても中二階的、あるいは盲腸的存在であると言われる。実際そのとおりであって、今回の場合でも、最高責任者はもちろん本部長であり、実質的な担当者は警備救難部長以下の関係者であり、私が出る幕はほとんどなかったと言って間違いない。たいていの管区では次長もシーマン系であり、その場合には次長も本部長から真剣に相談されることがあろう。しかし、私の場合はそれもなかった。ただ、本部長は、各状況下においてここはこうこうしまたすよと、私に同意を求めると、説明するような具合に、私を立ててはくれていた。

しかしながら、私の立場はそれほど、事件に無関係ということでもなかったのである。それはどうしてか、私がさるところで行った挨拶を引用してその説明に代えたいと思う。

さるところというのは、事件からちょうど一年目ぐらいに当たる今年（二〇〇〇年）三月二十八日に東京で、当時の長官をはじめ保安庁内の関係者二十人ほどが集まって開かれた「不審船同窓会」でのことである。岩男九管区本部長は任地をおいそれと離れられないということで出席していなかった。一方、警備救難部長は来ていた。二人とも、昨年四月以降も

九管区に留任になっていたのである。そのときの私の挨拶の一部である。

「本日は、私のような者も忘れずに呼んでいただいで誠に光栄です。皆様等しく感じられるでしょうとおおり、私は全くこの席には場違いな人間であります。ただたまたま当日その場に居合わせたということでお呼びいただいたものと思えます。次長もあの日は大変でありまして、と言いたいところですが、九管区警備救難部長もお見えになっている以上、そうも言えません。しかしながら、ただ一つ、次のことだけは申し上げておきたいと思えます。

岩男本部長は着任当初から、巡視船による射撃ということについては非常に積極的でありまして、対馬海峡などで韓国の漁船になめられているような状況はどうい許せない、私が必要なときには発砲の命令を出します、ということを目頃からおっしゃっていました。その機会がこんなにも早く実際に訪れたことに驚いたわけですが、今回の事件において、それくらい積極さがあって、やつとあの程度のことのできたつまり、ぎりぎりのタイミングでようやく撃つことができたということ、私、あの場におりましてつくづく感じたわけです。仮にもっと慎重な本部長であつたら撃つ機会を逸していたかも知れないと。

そういう本部長でしたので、私に対しても常々、私（本部

長)が不在のときは貴方(山ざるのこと)にやってもらうことになるのですからね、と言われ、関係の規定等も読んでおくように、などと私は教育されておりました。で、私も、いざというときにはやるかと、そういう気持ちになっていないでもありませんでした。ですから、もしあの日、本部長がお

## 山鳥先生と森鷗外のこと

谷 口 捷 (氷上町)



この前の柏陵同窓会で本誌30号に載せられた山鳥先生の思い出が話題になった。最近色々な会合等でアルコールが入ると特に、言わなければ良かったと反省することが多くあり、そのときも優等生達の思い出ばかりでなく、私のように、また違った想いを抱いている人も居るはずだが、と言ってしまい、下手で嫌いな文章を書くのはめになってしまった。しかし働きの悪くなった頭を使う機会が与えられたこと、山ざる誌に感謝しなくてはいけないのかもし

られなければ私が、もちろん警備救難部長に全面的に助けて貰ってではありますけれども、やはりあの状況下ではやったのではないか、というふうに思っております。そういう意味では、私もここに参加させていただく資格が少しはあるのかなど、考える次第です……。」

れない。

昨年、私達高校八回生の幹事は高校修学旅行と同じ場所を訪問するという楽しい企画をしてくれ、私も参加し自己紹介で高校時代はいわゆるワルであったと挨拶した。今から考えると、それはヨイコではなかった程度と思うが、その原因は多分に先生への反抗心からであったように思う。

私にとっては苦い思い出であるのに、山ざる誌前号に記されている良い思い出を拝読し、うらやましく思ったものである。非礼な部分は充分承知のうえで筆を進めることお許し頂きたい。

入学して間もなく、初めて作文を書くように命じられた。そして先生は次の授業で、悪い作文の例を読みますと早口で読み始められた。私も聞いていて、読まれている人はかわいそうだなと思いつながら、それでもなかなか難しいことを書くものだと感心していた。ところが、文中の各所に出てくるカッ

コハジメ云々カッコトジの補注の内容に覚えがある。もしかしたら自分の書いたものではないかと思ひ始めた。

生意氣ざかりの私が書いた内容がどのようなものだったかは記憶にない。自作と確信してからの時間の長かったこと。

先生の早口があのように遅く感じたことがなかった。今でもそのときの情景が鮮明に浮かぶのが本当に悲しい。人情を解さないヤツ、コンチキショウメ！（失礼）と怒り心頭、それ以後はなにかにつけて反抗することになった。上手な文章はまだしも、下手な作文を他人に聞かせても益にはならない。

最近、教育現場で問題になっている暴力のことだが、勿論愛の無い暴力は許されることではない。しかし、子供の頃悪いことをして殴られたり、職員室の前で立たされたりしたことなど、私にとつては納得済みで苦痛を感じなかった。嫌な思いをするくらいならそれをやめるといふ解決法をとる特技（？）を持つ小生も、この一件は才能の問題であり、逃げ道が見つからない。こういうことが連続すると耐えられないだろう。このように出来る悪いことをさらすやり方は最近のいじめと同様に感心できない。

それ以後、先生への反抗は続き、森鷗外をどれほど推賞されても夏目漱石の小説しか読まないことにしていたし、作文嫌いは他の葛谷先生の時間にも及んだ。それは、このような良い天気にはもつと健康的なことをするべきだと運動場へ飛

び出し、「時間切れ、つづく」と書いて提出する。さすがに次の時間に、「つづく」とは後で書くということだろうと再び書かされ、「書くことなし」にすべきだったかと後悔した思いもある。

そしてまた、山鳥先生が最終学年の国語担任となられた。それは二月となり大学の入学試験も始まり、受験に行く生徒も多く、授業が出来ないと判断されたか、また作文である。

小生は受験準備不足で少しでも時間が欲しいと焦っていた頃で、弱者に対する思いやりが欠けているとばかり、無謀にも拒否してしまった。その結果は先生も情けをかけて下さったのか、落第点でなく成績2であり、幸いにも卒業は出来た。

後ほど担任の山本義丸先生より、君の内申書を書くときは少しかわいそうだったと言われたのを覚えていた。それ以後も坊主憎けりや袈裟までの類だが、矢尾氏の記しておられるように、先生があれだけ崇拜しておられた森鷗外とはどんな人物かと常に関心を持ち続けていたし、またその類の資料は注意して読んでいた。

その件についてR社の研究所でスピーチする機会があった。当時は「一杯のかけそば」といふ感動の物語が騒がれていてその作者が正確でないかもしれないが、詐欺師的人間だったとかで急激に下火となっている頃であった。それを例にとり、作品に感動するのか作者の人格までも問題にするのかと問い

かけて、森鷗外について話したことがある。森は陸軍医務局のお偉方るとき、親友であり医学界の大御所である東大医学部教授青山胤通と組んで、本来ならノーベル賞をもらっている。決して不思議でなかった二人の研究者を迫害している。

第一は鈴木梅太郎の場合である。今でこそビタミンBの発見者として有名であるが、発見時は東大の農学部出身で医学として亜流という理由だけで認められず、鯛の頭も信心からと面罵されたそうである。当時日本では脚気の病気で毎年三万人ほど死者が出ていて、軍部でも困っていた。そこで陸軍軍医局長だった森はその調査会会長として、青山の「医者でもなく、脚気という病気を熟知してもおらぬ農学者に、脚気の原因がそう簡単に分かってたまるか」と言う意見に同調し、脚気の病気解明を十数年遅らせることに貢献した。最近、裁判となっている血液製剤の問題と比べて、同等以上に罪深いのではないかと感じるのは私だけであろうか。

第二は北里柴三郎の場合である。北里は破傷風菌の研究で有名である。血清療法についても、発明者はノーベル賞をもらった連名の論文者ペーリングのように言われているが、結核菌の発見者コッホによると、どうやら血清療法の開祖は北里のようである。この場合も日本人が足を引っ張っている。ある個人的な事情で、東大入学が遅れているために、ラインからはずされたためであろうか。森は陸軍軍医総監として前

記青山を助けて内務省より北里を追放している。

そのため北里は福沢諭吉の援助を受けて伝染病研究所を創設した。これも軌道に乗ると取り上げられたりしている。このことを詳しくはここで述べるのが出来ないが、興味のある人は参考文献を読んで頂きたい。余談だが現在でも、慶応大学と北里大学は密な関係であるのはそのためであろう。

前記主流意識、公の場での面罵、権利者の横暴とかは一般人達にとつて信じられないかも知れない。しかし小生のような低レベルでもしばしば経験したことがある。私のように大学卒業時の専門以外で仕事をしてきた者が、技術の世界で官庁およびその類の所から仕事を手することは非常に困難である。技術論文においてもしばしば嫌な思いを経験したことがある。その点、民間は競争が激しいためか、専門には関係なく良い悪いで判断してくれたようであるが、それ故あまり芳しいことではないが、前記の特技をしばしば発揮することになり、会社もしばしば辞めることとなった。委員会での面罵も、一度仕事の関係で交通委員会に出席して意見を述べたため、委員長より怒鳴りつけられたことがある。

もともはずっと後になり、その人の大学でばったりお会いしたおり、ペコペコされて驚いた経験がある。

第三の横暴、土木の世界ではほとんどの仕事を役所から受注する。公共投資の恩恵を受ける建設コンサルタントの会社

で、役人の天下りが繰り返されて乗っ取られた例を身近に知っている。最近官僚の腐敗が言われている。中にはりっぱな能力のある人が多くいるにも拘らずである。昔から日本の役人は優秀だと信じられていた。自他ともに認めているこのことで、誤った何かがあるように感じてしかたがない。

優秀な役人とは勉強が出来て、試験の成績が良くエリートコースを歩む人を言うのではないだろう。自分の利益ばかりを考えたりせず、悪いことをしないで、国民のために本来の仕事を行えば行く役人のことを言うのではないだろうか。思うに、かつての日本の発展は優秀な役人とともに、底辺で支えていた人達が良かったからであろう。

最近、私は中古住宅を購入したために、自宅の改修の機会が多くて経験することだが、大手の元請けより下請け技術者の中に、誠実で輝いている人を見かけるのがしばしばである。非常に喜ばしいことであり、嬉しくなる。虚業のみが脚光を浴びている昨今、こういった物を造る実業の人達が良い思いをする世の中になればと、願うこと切である。何事につけ世の中で本当に役に立つことは大変難しい。しかし、どのような場合でも、せめてマイナスに働くことだけは厳に慎みたいものである。

大変わき道にそれたが、そういう意味で森鷗外を尊敬することが出来ない。思うに、反対意見に耳を貸さない独裁とか

それを引き起こし易いシステム、そして権力を持ち易い管理社会は主義、思想に拘らず良くないと思うようになった。

最近津和野に行ったとき、森鷗外のお墓で頭を下げてきた。アンチ巨人は巨人ファンという言葉もある。山鳥先生への想いも幾分懐かしく感じるようになった。

私がファンであったプロ野球南海から、金の力で優秀な選手を引き抜いたため、強烈なアンチ巨人となった私も、最近緑の自然とメダカのある池、それに太陽エネルギー利用に便利な屋上を非常に気に入る、移り住んでいるのが神様のいたずらか、皮肉にも読売ジャイアンツの本拠地のよみうりランドである。長い人生においては、仲の良い友人とか、気の合った仲間といえるのも平穩で心安まるが、ときには個性の強いあるいは独創性のある人物と関係するのもまた良しと思うようになって来たこの頃である。(敬称略)

#### 〈参考文献〉

- 飯沼和正著「北里柴三郎 その仕事と人生」『技術と経済』二二三
- (一九八六・四)、一三三(一九八六・五) 科学技術と経済の会発行
- 飯沼和正著「鈴木梅太郎 その仕事と人生」『技術と経済』二二四
- (一九八七・二)、二四一(一九八七・三)
- 篠田達明著「闘う医魂 小説北里柴三郎」文芸春秋社発行

流寓悠悠―須磨から八王子へ―

田村 三穂 (春日町)



本名・田村正男、  
三穂 (さんすゐ)  
は俳号、俳句は趣味、春日町出身

○平成七年 (一九九五年)

罹災して須磨を去る日の別れ霜  
野に山に名残の花や須磨さらば  
菖蒲湯やいのち拾ひて子の家に  
梅雨さなか乗換三度被災地へ  
月祀る大草原の辺に住みて  
喜寿傘寿疾とつくに過ぎし夜長かな  
仮住みか終ついの栖すみかか虎落笛もがりふえ

○平成八年 (一九九六年)

いくさにも地震なにも生きて屠蘇祝ふ  
セーター着て明治生まれを隠しけり  
濁世じよくせにも武蔵野の草芳しき  
いささかの地震おびにも怯え寒夜なる  
冬籠すでに戒名授かりて

○平成九年 (一九九七年)

やと辿りつきし米寿の春なりけり  
赤飯は大納言小豆米寿の賀

米寿の春されど妻亡きむなしさも

豆飯を好むは田舎育ちゆえ

桐の花咲き郷愁のしきりなる

夕焼けて「夕焼小焼」のチャイム鳴る

界限を自転車散歩の小六月

そこばくの余命大事に秋団扇うちわ

粉雪舞ふ妻を葬はふりし日の如く

死を恐れず病むを怖るる余寒かな

○平成十年（一九九八年）

武蔵野のみささぎほとり青き踏む

岩風呂の窓に迫れる青嶺かな

溪流の音夕づきぬ鮎あゆの膳

螢見に行かず夜道に自信なく

○平成十一年（一九九九年）

体育の日とて歩きぬニキ口ほど

このあたり陣馬街道木の実降る

縁側の腰かけ話秋日和

用心の杖を小春の散歩にも

奏もくろでるる水音いづこ枯葎もぐら

富士に雪伊吹に雪や計ふへ急ぐ

○平成十二年（二〇〇〇年）

ミレニアム卒寿の春の明けにけり

長生きも芸の一つと屠蘇つ注つがる

鶯や峡に畦塗る老一人

峡の畦つやつや塗りて老去いにし



◆足立真一さん

二十三年前、青垣町より出て来て、今も野菜、花作りと、八十九歳の母と共に元気で暮らしております。(九十歳を迎えられた、足立国太郎さんが、宮前区長より長寿のお祝いを受けられた様子を報ずる町内会誌の記事と写真が添付されてきました。||編集部)

(H 11・2)

◆足立美都子さん

老母の介護のため、このたび柏原へ移り住むことになりました。長い間ありがとうございました。(六六九—三三〇五柏原町下小倉五〇六)

(H 12・5・5)

◆大槻 伸さん

三人の子育て真っ最中です。夫婦共々実家が遠く忙しい毎日です。

(H 12・4・1)

◆桂 照子さん

長い暑い夏も終わり、急に冬支度をしなければならぬ気温になってしまいました。山ざるありがたいございました。皆々様のお元気なご様子を拝見し、力づけられます。

(H 11・10・23)

◆岸部正巳さん

丹波にもたびたび帰っておりますが、親戚関係も年を取った人が多く、見舞いだとか、不幸があつて帰ることが多くなりました。車で帰ることが多いのですが、春日インターまでの600kmは長く感じるようになりました。最近九時間、十時間とかかるようになりました。

(H 11・10・22)

平成十二年三月に東京都を退職し、

田舎と東京を行ったり来たりしております。これからは田舎で暮らすほうが多くなると思います。田舎の知人、友人もだんだん少なくなっております。

(H 12・5・6)

◆国村きぬえさん

十月に柏原に帰りました。昔からの柏原町はときどき新しい構えの家ができています。道路もせまく、割合ひっそりしているのにくらべ、町はずれからは、大きな建物も並んでいるのに驚きました。柏原藩の面影は、だんだん無くなるようで、淋しい気がしました。

(H 11・10・9)

◆坂上五朗さん

なつかしい古里の地図や写真があり、郷愁をそそられます。年を取るにつれ古里が遠くなり、埼玉、栃木、群馬の山々を見て、里心を起こしています。次回は古里変貌の写真集があるといいですね。

(H 11・10・19)

◆清水正男さん

老令ながら、おかげさまにて元気で暮らしております。皆様の御健康と御多幸をお祈りします。(H 11・11・2)

◆ 荘 正衛さん

昨年春以来歩行不如意で上京はかなわず。貴会創立時に亡父入会の記録あり。百年の縁今更ながら不思議に思っています。貴会の将来の発展を祈ります。山ざるの編集、素晴らしく、楽しみに拝読させて頂いています。

(H 11・10・16)

◆ 土田直吉さん

毎秋、山ざる発行に御尽力下さると、感謝致します。

昭和の初め上京してから七十年を経過。途中戦時疎開や入隊のため空白がありました。再上京してから五十年。丹波も遠くなりました。同窓の友も少なくなりましたが、時折思い出いつぱいの電話のやりとりを、たのしみしています。

(H 11・10・27)

◆ 常岡千紗子さん

“山ざる”愛読しています。新世紀を迎えるに当たって、新企画も盛り込

まれますよう希望します。

(H 11・11・4)

◆ 畑 雅樹さん

運輸省の委託を受けて、規制緩和の一環として鉄道車両関係の法律改正に取り組んでおります。面白い仕事です。

(H 11・10・21)

◆ 平元富美子さん

昨冬、我が家の内部改造、今年は夏の終わりから秋にかけて外廻りをやってもらいました。毎日大工さんが来ておりまして、一年がまたたく間に過ぎました。今年もお伺いできませんがよろしく願います。

(H 11・11・5)

◆ 藤井宏次さん

年金生活に入り、娘家族と二世帯生活です。趣味は旅行です。

(H 12・4・7)

◆ 細川倫夫さん

年会費遅れましたが御送りします。ここ数ヶ月外地に行ったり来たり(仕事で)で、総会、景品協賛等参加できず申し訳ありませんでした。

(H 11・11・24)

◆ 前田和秀さん

老人保健施設にて、平均年齢八十三歳七〇パーセント痴呆、一〇〇人入所、ダイケアー三〇人の施設で、施設長として働いています。目くばり気くばりを職員に指導し、なるべく老人の自立をすすめています。

(H 12・5・16)

◆ 山岸幸子さん

いつも「山ざる」を懐かしく思いながら拝読しております。ふるさとトピックスでは、丹波を身近に感じました。次号楽しみです。

(H 11・10・22)

◆ 依藤廣次さん

虫が齧くように、ごそごそ毎日動き

ながら、なんとか一日一日を消化しております。全身を覆う老化は致しかたありませんが、余命を頑張つて生きてゆきたいと思ひます。(H11・11・6)

◆山本一志さん

郷友集いの会には、いつも都合で欠席いたしておりますが、来年は定年を迎え、現役を退くことになり、次回は是非出席させていただきたく思っております。(H11・11・5)

◆若森敏郎さん

何かと取りまぎれまして、今回は久しぶりに出席させていただきます。九月三十日の東海村ウラン臨界事故は、大騒ぎの割に外部事故は少なく、やっと沈静化したところです。十月二十四日に土浦で本件もまじえて、三時間ほど電気の話をしました。幸い好評だったようです。(H11・10・27)

◎訃報

平成十二年八月三十一日までに事務局に届いた訃報です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

足立	玉治殿		
小川	晴通殿	平成11年7月11日	
金子	一二殿	平成6年1月29日	
小池	千代子殿	平成10年12月17日	
高木	幸子殿	平成11年5月24日	
田	浩一殿		
西垣	英夫殿	平成11年11月20日	
吉住	恒次殿	平成11年7月15日	
小山	一美殿	平成12年6月29日	
田辺	泰久殿	平成11年	

◎「お詫びとお礼」

『山ざる』誌30号に同封した払込取扱票に加入者番号の刷もれがあり、会費納入に大変ご不便をおかけしましたことを、深くお詫び申し上げます。

平成十二年四月、改めて会費納入についてのお願いをしましたところ、予想を上回る多勢のかたがたから、ご芳志をお寄せ頂きました。

関係者一同、「さすがは郷友」と感激にひたつたことでした。ここに深甚なる感謝の意を捧げる次第です。どうもありがとうございました。



## 松山 確郎 先生

(一九〇九〜一九九七)



## 自然を見る目と

## 人の道を教えられた

徳田八郎衛 (柏原町)

## 一 最後の授業

「これは私の夢ですが……」と松山先生は静かに切り出された。男子一六名、女子二名だけが受講する柏原高校第三学年地学最後の授業である。折りから国際地球観測年で日本の第一次南極観測隊を昭和基地へ輸送した「そうや」は氷海からの離脱に苦しみ、地学教室から望む高鉢山もうつすらと雪化粧し

ていた。地学を進学の受験科目に選んでいたのは天文班員の私ぐらいのもので、理工系進学には本道の物理・化学を選択する連中には絶好の「内職」の場なのだが、そんな不屈き者が一人も居なかったのは松山先生の巧みな授業法か御人格の為せる業だったのかもしれない。

叱る時も荒い声は絶対に出さず、口元を少し弛めてトツトツと説かれる先生の口調は反抗期の高校生には雷を落とされるよりも効き目があった。修学旅行の夜行列車で幾人かの女生徒が座席の下で寝ようとしたが、巡回に來ら

れた松山先生の「情けないことをしてくれるな」の一言でゾロゾロ這い出したそうだ。授業においても同様で、メリハリを効かせた講談師風の口調とは正反対であったが、誰も眠ったりせず引き込まれていく。後に自分が教壇に立つようになってからも先生を思い浮かべると不思議で仕方がなかった。

私は一年生の理科で化学を選択したが五月になっても担任教師が着任しない。毎週四時間も校庭でサッカーを楽しむことになったが、松山先生担任の生物を受講していた級友の「確ちゃん、お前らーを睨んどっちゃつたじよ」という一言で首をすくめた私は、神妙に「酸化と還元」の自習に励まざるを得なかった。睨まれようが叱られようがヘッとも思わない反抗期だったが、松山先生には何故か「悲しませては申し訳ない」と感じるものがあった。「海外のある土地にしばらく住み、現地の人と同じ生活を体験し、それから

別の土地へ移って……生徒たちは度肝を抜かれたようにボカンとしている。無理もない。金満日本人が仕事ではなく遊びで海外へ溢れ出る八〇年代は未だ遠い先であった。

だが十一年後の昭和四十三年春、定年を待たずに氷上農業高校を退職した松山先生は十月に北部インドのジンドウラ村へ飛び、四ヶ月にわたって灌漑農業を手伝いながら敵立する日本式野菜栽培法を教えて夢を果された。その際にインド各地へ案内できなかつたのを悔やむホスト・ファミリーからの招待で、三年後にセイロン、デカン高原、ネパール、カシミールを周遊された際の絵葉書では「今回は観光旅行です」と謙遜されていたが、この二ヵ月に及ぶインド探訪も松山先生には研修の連続であった。

館を訪ねてインドの資料を収集しておられたと後で知った。壮年期の夢をこうして定年後見事に実現された、そして現役時代も退職後も教え子や地域の人々から慕われ続けた松山先生を育て上げた環境を、先生の自分史と私が直接お聞きした情報から再現してみたい。

## 二 松山青年の挑戦

大正十年新春、旧大路村小学校六年生だった松山少年に担任教師は柏原中学校への進学を勧めた。医者になるなら進学を許すという父親に、医者はいやだと応えた松山少年は高等科二年を終えてから大阪府池田師範へ進んだ。

数十人の同級生から柏中へ進学したのは僅か三名。そして池田師範へ進んだのも三名だった。県内の御影師範や姫路師範よりも自宅に近いという理由で当校を選んだという。三名が郷里を越えて丹波大山駅へ出たのも、運賃が

かなり安くなるからであった。

ここで五年間学べば、現在の大学二年生に相当する年齢で小学校訓導となる。だが三年生になったある夜、地理担当の舎監から高等師範への進学を勧められた松山少年は、果敢に挑戦した。師範学校では上級学年に進むほど教育学や教育実習で多忙となり、英語の授業などは少なくなつて進学には不利である。だが松山少年はみごとに東京高等師範理科第三部（博物学）の入学関門を突破する。

戦後派の私などは高師も師範と同様に給費制の恩恵に全員浴するのだと思つていたが、何つて見るとそうではなく志願者の中から家庭事情や一学期の成績を勘案して選抜する。猛勉強の甲斐あつて松山生徒は一五名の第三部生徒の中から僅か三名の給費生に選抜された。月額二五円であった。

昭和七年三月、高師を卒業した松山青年は、四つ年下の青山師範卒業生と

一緒に赤坂の歩兵第一連隊へ短期現役兵として入営する。これは師範卒業生の恩典で、かつ義務でもあった制度で、一般の兵役は三年なのに五ヵ月の訓練で伍長に任命して除隊させ早く教職に戻すのである。ここで松山青年は、熱意溢れる教育隊長、後に二・二六事件の首魁として刑死する香田清貞中尉（当時）に出会う。

技術研究所で長く勤務した後、私が赤坂の防衛庁本庁へ転属した時も、かつて松山先生が習志野への行軍で通過された浦安海岸に私が居を構えた時も、先生は当時の想い出と併せて訓練の場では厳しいが常に温和な笑みをたたえた香田教官への深い憧憬を書き送ってこられた。そしてどちらの便りも、毎年二月二十六日がくると事件に関する書籍の一つを取出して読み、教官の冥福を祈りますと結んであった。

事件の際はすでに中隊長を下番して第一旅団の副官だった香田大尉は、陸

相官邸へ乗り込んで川島陸相はじめ数々の将星と談判し、今の九段会館に設けられていた戒嚴司令部へ出向いて交渉するなど指導的な役割を果たした人物である。八月には全員トコロテン式に上等兵になるはずなのに同教官の厳しい処置で昇任できない者も現われて驚いたが、月末には全員が伍長となって除隊できた。

「大学は出たけれど」の不景気の時期である。師範生徒は入営の前から赴任校が内定していたが高学歴の高師生徒となると逆に探しく、何とか小学校にでも……と管内から母校に度々依頼していたところ、秋田師範に博物教師の欠員があり、除隊したまま帰省もせずに異郷秋田へ向った。明治六年に秋田伝習学校として開校された老舗の師範である。

三冬が過ぎてスキーも上達し、北国ならではの自然を知って永く勤めたい学校であったが、老齢の両親は結婚を

機に関西の師範へ転校するよう希望してきた。幸いにも母校の池田師範での採用が決定し、昭和十年三月の春休みから転勤と挙式を済ませた松山青年は四月から母校の教壇に立ち始める。

### 三 進学を断念して柏原中学校へ

研究心溢れる松山先生は若くして大阪府視学委員に嘱託されたが、高師時代の恩師の紹介で研究社発行の学生文庫「岩石と鉱物資源」を執筆された。定価五十銭で昭和十七年に刊行されている。その七月、松山先生は恩師からの勧めもあって母校が昇格した東京文理大地質鉱物学科を受験される。

すでに三十四歳だから相当の晩学だが、池田師範での教え子と一緒に見事に合格された。戦時下の半年短縮、繰上げ卒業の一環で九月の入学は迫っていたが八月末に父親が急逝する。奥様はじめ一族全員が上京・進学を強く勧める中で「神経痛に悩む母親を、こん

な大きな古い家に独りで置いておけない」と判断した松山先生は進学を断念された。

秋に亡父の法要で帰省するや、東京高師の先輩とはいえ、まったく面識のない柏原中学校校長を訪ねた松山先生は、どんな科目でも担任するので家から通勤できる中等学校へ採用されるよう援助を乞われた。当時の校長は柏中第三回卒業生（明治三十七年）で昭和四年から約二十年も柏中学校を務め、研究社発行「英語研究」への度々の論文寄稿でもよく知られた植木孝之助さんである。「化学を持つなら採用しても良い」との返事で、博物、特に鉱物学とは関係も深い化学に自信のある松山先生の転勤は可能となった。二十年間離れていた郷土での勤務である。

昭和十八年四月、四・五年生は一組、三年生以下は三組で職員は植木校長ほか教諭十九名という中規模の柏原中学校へ転勤された松山先生の十七年にわ

たる勤務が始まった。天文班活動の都合の中で、博識な松山先生に私は色々なことを質問したが、ある時「漱石の坊ちゃんを読んで判りますが、戦前の中等学校教員は全国を転動しますね。戦時中の柏中はどうでしたか」とお尋ねし「大半が他府県からの教師で地元出身は五名、汽車通勤は葛谷先生と私だけでした」という返事に驚いたことがある。「でも人手不足の戦時中は教師を探してくるのが大事で、私が池田師範から郷里へ帰るためには後釜を探し、そのまた後釜を探せと、その校長にいわれて：」と苦笑された姿が昨日のように想い出される。

先生の担任クラスは昭和十五年入学の四年生（柏中四十四回生）だった。学年主任は本誌三〇号で取り上げた山鳥鋭男先生である。やがて戦局は悪化し中学生の勤労奉仕も出征兵士宅の援農や炭焼から阪神間の工場動員にまで及んだ。勤労奉仕担当の松山先生も進

学する生徒の内申書を工場の寮でしたため、帰宅して柏中入試の準備に追われ、予科練へ入隊する生徒を見送る日々が続く。だが十年後の授業で当時の情況に触れられても「辛かった」とこぼされたことはない。

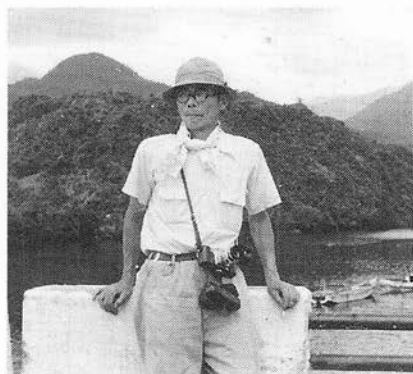
「蘆田（植田）憲雄君たちを叱りつけてもって：」とか「地下工場を造るため高鉢山から掘り出される土を生徒がトロッコに載せて運動場の端へ押し回すと玉の海部屋のお相撲さんがクルリと：」といつも明るく語られた。

#### 四 謙虚、勇氣そして率先垂範

柏原中学校の柏と柏原高等女学校の松葉とを合せた新しい校章の下に新制柏原高校が発足し、松山先生は新教科の地学主任、併せて生物担任、新設の生物班と天文班の顧問として活躍される。先生が天に還られた翌年、生物部・天文部（近年、班から部に名称変更）現役・OBは両部の会誌 NATURA

とKOSMOSの合同特別号「松山確郎先生を偲んで」を発行し、その遺徳を称えた。執筆者の大半は元班員だから、教科担任あるいは班顧問としての松山先生を描くものが多い。

特に初期の天文班OBたちは、昭和二十八年というまだ新校舎整備も大変な時期に柏高初の新校舎が誕生し、その屋上に銅板張りの天文ドームが四時赤道儀（自動的に恒星や太陽を追尾する望遠鏡）とともに設けられた喜びを



安房鉄船橋にて（1958年）

記し、その原動力となった松山先生の熱意を称えている。

だが第九回生として昭和二十九年に入学した私が松山先生に同情したのは教務主任としての任務だった。都会の進学校は課目選択の自由が殆どなく、理系・準理系・文系といったコースを選んだら、後はそのコースの「定食」課目を受講するしかない。ところが我が校は大学並みの、いや大学以上の自由な選択制である。私は普通科の理系コースだったが理科や社会の時間になれば学級はバラバラになった。学級自体も複数のコースで混成されている。理科を例に取ると二年生の理科では大半の生徒は化学を選ぶが、一年で化学、二年で生物という逆順の選択も許されるし、物理も履修できる。三年生になると物理か地学、そして今ごろになって（？）生物や化学を履修する者もいる。順序ぐらいは規制してもよさそうなのだが、生徒の側には受験で

選択する課目は早く履修しておきたいという希望があった。それをすべて認めるのだから大らかな学校だった。

しかし、こんな複雑な学級編成と時間割を春休みの間に作成する教務主任の苦労は並大抵のものではない。京大花山天文台見学に向う汽車の中でズバリ伺って見た。辛いとは絶対には言われない松山先生だが、「色々勉強させてもらいますよ」という謙虚な表現からその難しさが想像できた。また昭和二十四年に高校第一回卒業生を送り出してから教務が本職となり、担任学級を持たなくなった悲しみを率直に表わされた。先生は、それで生物・天文両班をあれほど熱心に指導して下さるのかなとも思った。

私が卒業した翌年の四月、松山先生は文部省令で公布された教頭に任じられる。折りから全国の公立校は日教組の勤務評定反対闘争で揺れ動き、三十四年三月、柏高分会も僅少の差で入試



事務拒否を決定する。松山教頭は毅然として立ち上がり「校長一人では入試実施は不可能なので私は分会決定に従いません」と発言して分会の了承を得た。続いて用務員や実習助手の例外適用も求めてこれも了承された。さらに各町の教育長や主事を試験監督に動員し、放送班員が協力する中を松山教頭が放送室から指揮して入試は無事終了した。採点も松山先生の説得で分会員が妥協した。すべて松山先生のお人柄、そして勇氣によるもので、一年前に着任の姉崎岩蔵校長お一人ではどうにもならなかったであろう。

十四回生の合格発表が無事に終るや松山先生は健康問題を理由に教頭と教務主任を辞任され、翌年四月、希望通り篠山農高黒井分校へ転勤される。帰省した私に「中々認可されない姉崎校長に人間ドックの検査結果と気分転換の必要性を訴えてようやく許可を頂いた、入試拒否騒動のシコリなんかあり

ませんよ」と朗らかに語られたが、やはりお疲れのように見えた。

その後、独立校となった水上農業高校を昭和四十三年に依頼退職されるや、松山先生は直ちに「丹波自然の会」を創設し代表世話人となられた。会報「丹波の自然」の執筆は平成元年の第232号まで二十一年も続いたと聞く。インド農村との交流、鹿場地区総代や春日町町議といった地域への奉仕で多忙な三十年だったが、「新・兵庫の自然」「兵庫のふるさと散歩・丹波編」「丹波の自然」などの出版では共著や編集で活躍された。昭和五十六年には兵庫県ともしび賞を受け、平成九年には（財）日本顕彰会より社会貢献者として表彰されたが体調悪化で上京は中止となり、十二月二十日に享年八十八歳で亡くなられた。

数々の自分史を出版されたが平成二年の「私のインド」は比較文化論としても価値の高い内容なので、私は「外

国で遊んできただけの手記が国際理解やら国際交流やらの大義名分でドンド出版されています。丹波新聞社からの出版では残念ながら水上郡でしか流通しません。いい出版社をご紹介しますから全国の人が読めるようにして下さい」と何度もお願いしたが、「いいんだよ。最後まで丹波でお世話になったから出版も丹波でやりますよ」と謙虚の固まりのようなお人柄は晩年も変らなかつた。

前述の追悼文集に記されたお人柄のキーワードの多くは情熱、慈愛、謙虚、率先垂範であるが、秘められた勇氣も忘れられない。学校崩壊と関連してかつての師範学校が見直され教員養成制度が再検討されている今日、奇しくも共に師範から上級学校へ進学し、実践躬行して若者の訓育に当たるとともに研究者としても精進された山鳥銳男先生と松山確郎先生の偉大さを改めて痛感する。

## 松山確郎先生との絆

久保 良雄（山南町）

松山先生が柏原高校を去られ氷上農高に移られる直前の二年間、私は松山確郎先生と接する機会に恵まれた。すなわち、私の柏原高校の一年生から二年生にかけてで、私の高校生活の最後の年である三年生の時にはもういらっしやらなかった。

私は松山先生の授業は受けていない。先生とのつながりはサークル活動である天文班の顧問と一班員としての関係を通じてであった。先生は情熱を燃やして班活動を指導しておられたし、私もかなり熱心な班員を自負していたので、先生と親しく話したりする機会は多かった。担任の先生とよりもむしろ近しい関係にあったように思う。

加えて、先生のご子息（養子であられたが）の琢郎氏がたまたま私と同級

であった。そんなこともあって、私のことをやや特別な目で見ていただいていたような気もする。その琢郎氏はかなり若くして亡くなられた。先生は子供運にはあまり恵まれられなかったようだ。しかし、お孫さんは残られ、現在健在であると聞いている。

松山先生は謹厳実直、物静かな先生で、冗談を言われるのを聞いた記憶がない。思えばちょうど私の今の年齢と同じぐらいであったわけであるが、そのころの私の印象からすればかなり老成されていたように思えた。

先生は決して天文学がご専門ではなかったが、私は、先生を天文の先生としてしか見ていなかった。一方、その頃の私は、いろいろな天文関係の本や雑誌を読みかじっていたりして、全く傲慢にも、天文学に関する知識などの点で、先生を少し物足りなく思ったりしていた。先生のご関心は実は、生物関係を中心として森羅万象に及び、自然万般に深い造詣を持つておられたと

いうことを知ったのは、かなり後になつてからであった。

当時の柏原高校における天文班の活動は活発であった。まず、太陽の黒点観測、これはアマチュア天文観測の標準メニューともいべきものであるが、これを長年にわたって続けていることや、その質も高かったことは当時の全国の高校でも屈指であった。また、日食や、掩蔽（恒星や惑星が月に隠される現象）の観測も優秀で、黒点観測ともども東京天文台（現在の国立天文台）からしばしば誉められたりしていた。

これらの観測を、松山先生自身も結構やっておられたが、班の活動はほとんど生徒に任せておられた。もうこの頃には、班の伝統というものがすっかり出来上がっていて、そのようになつても大丈夫と判断されていたのであろう。したがって、先生が柏原高校を去られ、文字どおり生徒だけで班活動を運営していかなければならなくなつたときも、それほど途方に暮れるということとはな

かった。それまで年一回何処かの天文関係の施設に連れて行って貰っていたのを、その年には自分たちで行き先を決めて実行したり、新しく、彗星の写真を撮るなどという試みも始めたりしたが、それらを報告したときには大変喜んでいただいたのを憶えている。

先にも触れたが、私は、松山先生が生物学を専門とされつつあらゆる自然現象を興味と研究の対象にされているということ、そして多くの分野で種々の業績を上げておられるということ、かなり後になって、先生からたびたびご著書をいただいたり、人から聞いて初めて知った。

先に、私は先生から授業を受けたことがないと言った。しかし、厳密に言おうと、一時間だけ受けたことがある。一年生のとき、私は他の先生の生物の授業をとっていたが、その先生が休まれたとき松山先生がピンチヒッターとして来られたのである。顕微鏡で何かのスケッチをする実習であったが、先

生が私のところに回ってこられたとき、私のスケッチのここはちょっと違うのではないかと、穏やかに指摘された。小さいときから絵には少々の自信を持っていた私は、そのとき軽い反発心を抱いたのを憶えている。何しろ当時の私は、先生は生物もおやりになるのかという認識でしかなかったのである。しかし、そのときは先生の言われるのが正しいことを認めざるを得なかった。

ずっと後になって、先生から、インドに滞在されたときの記録である著書をいただいた。そこには、生き物、その他の自然現象から、人々の風俗に至る様々のことが、克明なスケッチとともに記されていた。その中で、インド菩提樹の一枚の葉っぱをスケッチされていたのが、私がちょうどその頃どこかの植物園の温室で見た実物を思い出させ、その正確さ、特徴が見事に捉えられていること等で印象深かった。

それらを見たとき、先生が何をなさろうとしているのか、何故それをさせ

るのかを、私ははっきりと知ったのである。すなわち、先生はすべてのことに関心と愛情を持たれ、それ故、それらすべてを記録せずにはいられなかったのである。それはダーウィンとか、シーボルトとか、モースとかの精神にそのまま通じるものであった。先生はまさに真の意味での博物学者（ナチュラリスト）であったのである。古いと言えば古い学問かも知れないが、しかしそれは人間が自然を含めた周囲に接するときの態度として、永遠不滅であるべきものであろう。

このように、松山先生の真の姿を理解できたのは、先生と別れずと経ってからである。先生と直接お会いした期間は短く、私と先生との絆はそれほど強いものではなかった。しかし、私がお後長い間にわたって先生から知らず知らずを受けていた影響を思うとき、それは決して弱いものでもなかった。

## 氷上郡六町合併協議会が発足

小田 晋 作（柏原町）

昨年四月、旧多紀郡四町が合併して篠山市が誕生。全国的に市町村合併の機運が高まる中で、同市に視察が相次いでいることは、前号の本欄でもお伝えした通りです。

これに刺激されてか、氷上郡でも青年会議所を中心に、法律に基づいた「六町合併協議会」の設置を求める署名運動が昨秋から始まり、紆余曲折はありましたが今春までに各町議会とも一応、協議会の設置を可決。六町長が八月、協議会の設置規約などについて合意するに至りました。

九月には職員を一人ずつ出して六人による事務局が発足。吉田照三・市島町長（郡町村長会長）を会長、西田正敏・氷上町議会議長（郡町議会議長会長）を副会長に、十月から協議を始めます。

協議会は各町から六人（町長、議長と学識経験者四人）ずつ、計三十六人の委員から構成され、合併の是非を初

め、法律に定める市町村建設計画の作成などに取り組むことになっていますが、協議会はあくまで「是非」を決めるもので、これで合併が軌道に乗ったというわけでは決してありません。

現に、旧多紀郡では一九五五年（昭和三十年）に一町十八村から二町四村（後に四町）に大合併した後、昭和三十年代からいく度も郡一本化の試みがなされましたが、そのたびに財産問題や庁舎の位置などをめぐって紛糾。六六年（昭和四十一年）に発足した合併協議会は四カ月で解散、七三年（昭和四十八年）に再発足したものの、またも三カ月で解散というていたらくでした。

しかし、近畿自動車道舞鶴線の開通やJＲ篠山口までの複線化などに伴い、急速に押し寄せる開発と都市化の波の中では、さすがに合併による広域行政の推進を考えないわけにはいかず、九二年（平成四年）に町会議員による研究会の形で二十年ぶりに合併が検討され始めてからは、うって変わったようにスムーズに協議が進んでいったのでした。

このように、「青山藩」として歴史的に住民間に一体感が強かったと思われる多紀郡でさえ、最終決定までに三十年以上の歳月を要したのです。

ところが氷上郡の場合、一本化の話が公式に話される



事務局が発足し、10月から合併協議の準備が始まる。  
(丹波新聞・9月14日号より)

のは今回が初めて。しかも、多紀郡では何と言っても「篠山」が軸にならざるを得なかったのに対し、こちらは突出して求心力を持つ町がなく、日本海水系に属する市島町や春日町は福知山方面、加古川に面した山南町は西脇など播州方面への遠心力さえ目立つという実情では、

新市名、庁舎所在地等、どれをとっても一筋縄ではおさまらずにありません。

住民の意識は、私が耳にする限りでは、今のところ「賛否半々」でしょうか。消極派の間では、「現状で別に不自由は感じとらんのに、なんで合併せんらんのか」、「合併したら行政サービスが薄くなるんでは。また、中央部ばかり発展して周辺部は取り残されるのでは」といった疑問や不安があるようです。一方、早くから広域的な土俵での仕事に慣れている企業家、ビジネスマンの間では「郡一本くらの行政単位で当たり前」という意識が強いようです。

ともあれ、以前にも書きましたが、国も自治体もほう大な借金を抱える現状。補助金にぶら下がりが「国にならえ」に甘んじられていられる時代は終わりに近づき、その時に備え、足腰のしっかりした質の高い行政が求められています。

否定的な面ばかり考えては仕方ありません。ここまでお膳立てが進んだのを好機として、合併協議会が本来の役割を十分に果たしてほしい。そのためにも、役所任せではなく、住民自身が任意の勉強会をあらかじめ開き、協議会をリードするくらいの気概でのぞみたいものと、考えます。

(丹波新聞社社長主筆)

# ふるさとの祭り

その5

今出の  
「権現裸祭り」

## 「命神」として賑やか行事

足立 和巳 (青垣町)

今出の権現さんは、正式には熊野神社で、今出字ウシロガ岬に鎮座している。祭神は伊弉册命いざのみことであり、女性のたぬめの裸を好まれるので、神子かみこが裸で神事に参加するのだという伝承もある。「丹波志」と「氷上郡誌」によると、熊野神社は長祿元年（一四五七）までは、今の社より約二キロメートル弱奥の位知山の洞窟に祀られていた。ところが、その年の九月に火災にかかり、但馬の柴村の獵師王子七兵衛により現

在地に遷座されたようになっており、柴が座につかないと祭りが始められなかったと伝承している。

「丹波志」にも社家として代々安達伊勢守を名乗る者と、宮崎備前守が出ており、足立彦介政秀は当時の熊野神社の神主であろう。また四年前に亡くなられた金子聡胤とくね神主の前の神主は宮崎氏で旧柏原高等女学校の先生でもあった。従って、戦前までは遠阪村（遠阪・山垣・中佐治）・神楽村・柴村の産土神として祀られ、千人余りの氏子があったとのことである。従って例祭の裸祭りも百人以上の大変な盛大さだったようである。私が亡父に連れて行ってもらった小学生の頃が思い出される。

ところが、昭和十七年から戦争が激しくなるにつれ、裸祭りも次第に行われなくなると、戦後の復活も徐々で、殊に遠阪峠を越えた柴地区の氏子への例祭案内が途切れてしまったため同地区からの参加は稀のようである。しか

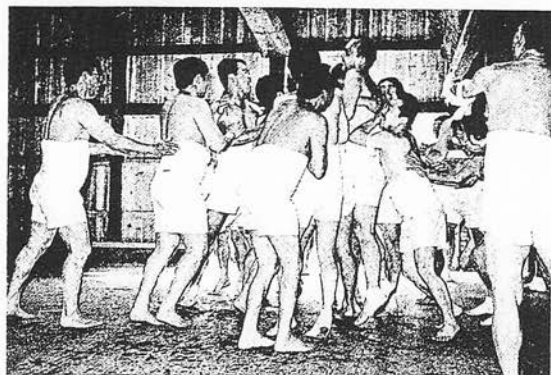
し京阪神地区からの参拝者が増えて来ており、現在では四・五十人の裸祭り参加者となっているとのことであった。

熊野神社、即ち権現さんの例祭は、「宵宮よいみや」と「本祭ほんまつり」から成っており、昔は九月十八日であったが、明治に入ってから一月遅れの十月十八日に変更され、現在では十一月三日（文化の日）に行われている。

本祭りの行事は、午前八時頃にトラックに乗せた「ふれ太鼓」が今出を出て旧遠阪村全体を昼までかけて廻ることから始まる。

十時頃には、神社境内で子供相撲が行われる。この頃から、若宮神社の鉦打太鼓二台を、子供二人が連続して打ち鳴らし、神事の間を除いて常に打ちに打たれている。

午後一時過ぎ、遠阪の役員十一人が拝殿に揃うと、神主によって祭礼が執行される。祭礼は、神社庁の定めた祭式によって行われる。その後、遠阪の



肩を組んで跳び上がる所作を繰り返す

役員は拝殿で今出の役員がくるまで時間をつぶす。

午後二時頃に祢の今出の役員八人が神社に着き、本殿と拝殿の間の座に着くと再度神主によって祭典が行われる。

祭典の間に、上半身裸の神子が今出公民館の前の川で禊ぎを行い、二人一

組で三、四組程が「ヨイサー、ヨイサー」と掛け声をかけつつ籠堂まで走っていく。相撲を取った子供達が籠堂こもどうの入口で待機し、腕を組んで神子の入場を阻止しようとする。腕組みを押しして籠堂に入場した神子は、籠堂のイロリを時計回りに三回回ったあと、「ヨイサー、ヨイサー、ヨイサー」と掛け声を掛け、肩を組み合せて飛び上がって床を踏む所作を繰り返す。同じように次の三、四組が禊ぎの後、今出公民館を出て籠堂に入場しようとするのを、中にいる者全員で入場を阻止しようとする。このように神子全員が籠堂に入場するまで続けられる。

それから神子は籠堂を出て、舞堂で肩を組み飛び上がる所作を行い、走って拝殿前に行って参拝したあと、舞堂と同じく肩を組んで飛び上がる所作をし、再び走って舞堂へ、更に舞堂から拝殿前へと七回半往復と所作を繰り返す。その後で神子の渡りが行われる。

本殿から舞堂を経て籠堂に入り、ここで若宮神社に供えていたオコワと御神酒を今出の神子から頂く。このあと、籠堂の裏手に出てその周りを三回半回ったあと、神を持った役員が走って拝殿に駆け込む。この神を持った役員が駆け出すと神子はそれを追って拝殿の前に上り、神の枝や葉をちぎって禪の腹にさす。この神の枝は、身の守りとして持ち帰る。神子の渡りが終わると、境内で神饌であるコケラ御供と餅をまき、例祭の一切の行事が終了する。

熊野神社は、「命神」とも言われ、丹波は勿論、但馬、播磨、攝津方面からも大病をしたり、健康が優れない人がよく参拝し、熊野神社のおかげで健康を回復すると、そのお礼として三年間または一生の間例祭に神子を出す習わしであった。神子は、白いパンツをはいているが、本来は禪を締め、腹に晒を巻いて左手に白い布を巻いて禪で参加するものとなっている。

かしわの  
「柏野」の金の鶏

「丹波むかしばなし」より

丹波の小多利の里に、小富士山と呼ばれる美しい形の山があります。昔、その麓は柏野と言って、広い野原が、一面に広がっていました。春になると、いろいろな花が咲き、秋には、白い薄が、風にゆれていました。

その柏野の真ん中あたりに、新助じいさんの家がありました。近くには家もなく、親戚の人もないので、おじいさんは、一人寂しく暮らしていました。そんな新助じいさんのただ一つの楽しみは、二羽の鶏にえさをやったり、卵をとったり、日向で一緒に話をして一日を過ごすことでした。鶏たちも新助じいさんによくついていて、足音を聞いただけで駆け寄ってきて、「こっこっこっ」と鳴いて傍から離れようともしませんでした。

ある日の朝のことです。新助じいさんは、激しい鶏の鳴き声で、目が覚めました。

「こっこっこっ、こけこっこうーこけこっこうー」  
続いてばたばたと逃げまわる音が聞こえてきます。新助じいさんがあわてて外に出てみますと、さあ大変です。大きな狐が大事な一羽の鶏を口に加えて逃げ出すところでした。

「こらっ！ その鶏を返せ！」新助じいさんは夢中になって広い野原を追いかけました。しかし、きつねの足にはとてもかかいません。とうとう狐は小富士山の山の中に逃げこんでしまいました。それでも新助じいさんはあきらめません。険しい山の中に入り、丸二日間、あちこちを探し回りましたが、とうとう見つけることができませんでした。

二日目の夕方、新助じいさんは、手や足を茨の刺で引っかきよろよろしながら自分の家に帰ってきました。もう歩く元気もないほど疲れていたので、そのままごろりと横になって休みました。



## ふるさとの民話と伝説

しばらくして新助じいさんは、はっと気がつき飛び起きました。そして、急いで鶏小屋にいつてみました。そこには可哀相に、残っていたもう一羽の鶏が死んでいました。新助じいさんが山に行っている間、水も餌ももらうことができなかったからです。新助じいさんは、死んだ鶏を抱き上げると、おいおい声をあげて泣きました。いままで大事に育てていた鶏を一度に二羽とも、なくしてしまったのです。新助じいさんは鶏をそつと自分の部屋まで運びました。せめて一晩一緒に過ごして、明日は土の中に埋めてやるつもりでした。

「ああ、本当に可哀相なことをした。また、あの世と一緒に暮らそう。それまで待っていておくれ」と言いながら鶏を縁側に置くと、そのままぐっすり寝こんでしまいました。

朝がきて、賑やかな小鳥のさえずりで目がさめた時は、もう部屋の中は明るくなっていました。あわてて起きながらふと縁側を見た新助じいさんは「あっ」と驚きました。

夕べ、確かに死んでいた鶏が、今見ると二本の足ちゃんと立っているではありませんか。その上、ちようど差し込んできた朝日をうけて、鶏の体が眩

いほど、金色に輝きはじめました。側に行つてなでみると、それは金の鶏にかわっていたのです。頭も羽も足も、みんな金になり、生きていた時のように、新助じいさんをじつと見あげています。おじいさんは金の鶏を抱き上げ、しばらく見つめていました。

「そうか、おまえは金の鶏になり、一人になったこの私が困らぬようにしてくれたのか。」頬にはろほろと涙が流れ落ちました。けれども、新助じいさんは、この金の鶏を売って、お金に変えることはどうしてもできませんでした。屋敷の中に穴を掘り、丁寧に埋めてやりました。そして毎日、二羽の鶏の為に水とえさを供えるのを仕事にしました。新助じいさんがなくなつてから、村の人たちはこの家の跡を「新助屋敷」と呼び、どこかに金の鶏が埋められていると、噂をしていました。

今では柏野は、立派な茶島や田んぼに代わり「新助屋敷」の跡が何処だったのか解らなくなつています。

（財）丹波の森協会発行「丹波むかしばなし」より

（木呂子転記）

## ■会員が出版した本

徳田八郎 著、別冊宝島編集部 編  
『今こそ知りたい自衛隊の実力』

別冊宝島刊

多くの軍事研究家、軍事ジャーナリストによって分担執筆された本書は、一九九九年夏に雑誌「別冊宝島」に連載されたのが文庫本化されたものである。中の一章を本会会員で防衛技術の専門家でもある徳田八郎さんが書かれている。

自衛隊の実態、さらに我が国の防衛力の真の姿等について、国民はできるだけ多くのことを知らされるべきである。その点で、それを一般国民向けに易しく解説した本書は貴重本である。一方、公に刊行された本となると当然外国人の目にも触れる。その中には軍事情報収集のプロもいよう。それを考えると、こまかで詳しく自衛隊の内部事情を書いて

いいのかという気もしてくる。

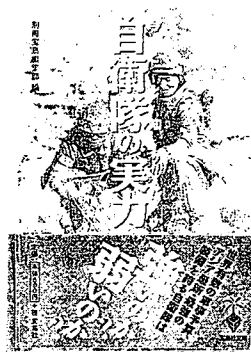
しかし、世界的にはこの程度の情報は常識で、日本人がその方面のことについてあまりに無知、あるいは幼稚なだけかも知れない。

徳田さんが書かれているのは、氏の専門である技術分野の、それも自衛隊のレーダー網についてである。レーダーは戦時においても平時においても軍にとっての目であり、その重要性は言うまでもない。対空・対水上、固定式・移動式と各種あつてそれぞれが目的に合った性能を持っている。そして日本の自衛隊のレーダー網の性能、充実ぶりは世界でも有数なのだそうだ。

その辺の事情が、「間に合わなかつた兵器」「間に合った兵器」（いずれも東洋経済新報社）を著わした著者ならではの強みを生かして、具体的な開発史にまでわたって詳しく紹介されている。ここでも、こまかで外国に知られても大丈夫なのかと心配

になるほどだ。しかし、日本国民としてこの程度は知っておいてほしいと著者は望んでおられるのであろう。なお、書評子は前に海上保安庁に勤務していたから、普通の人より多少は軍事知識もあるだろうというところで、本稿を編集部より頼まれたが、実はほとんど素人である。ただ、国家にとって軍事は、たとえば経済と同列に重要であり、自衛隊の使命は、たとえば大企業のそれよりもはるかに尊いと信じているので、本書は良心的な本であり、できるだけ広く読まれるべきだと、自信を持って薦めることができる。

(久保)



岩槻邦男・加藤雅啓編

『多様性の植物(全三巻)』

第一巻「植物の世界」

東京大学出版会刊

生物多様性という言葉は、ようやく日本のマスメディアでも使われるようになったが、一九九二年にリオデジャネイロで開催された国連環境会議(いわゆる環境サミット)で生物多様性条約が署名され、生物多様性国家戦略の策定が急がれるまでは一部の専門家にしか理解されなかった。当時のメディアも、オゾン層破壊やフロン規制は大々的に報じたが生物多様性とはなんぞやと詳しく解説したとは思えない。それは生物学界においても同様で、二〇世紀後半、生物界に普遍的な現象の解析、すなわちDNAをキーワードとする分子生物学の研究は飛躍的に進んだためチャホヤされたが、それと表裏の関係にあるにもかかわらず多様性の研

究は人目を惹かなかつた。

特に植物学においては、この研究がかって植物分類学と表現されたこともあつて切手の分類と同列に誤解され、現象を記載して弁別、整理する分類学などは科学の対象ではないと見る人が少なくなかつた。また個体レベル以下のミクロの研究と個体より上のレベルのマクロな研究とはお互いに異なり、相容れないと見る傾向は今も残っている。だが分子生物学の解析技術が生物多様性の研究にも大きな恩恵を与えたことにより、この研究はごく最近になって大きな変貌を遂げた。それは伝統的な生物多様性研究が無用になったというのではなく、それに基づく情報の蓄積があつたがために新手法による解析が成果を収めたのである。

編者の一人で、第一章「地球植物誌―植物の世界を俯瞰する―」も執筆した岩槻さんは、この情報蓄積を柏原高校生物班員の頃から半世紀も

続けてきた世界的な先達であるが、京都大学植物学教室の後輩を中心とした九名の若手研究者に植物の種多様性の全地球的な広がりをもとめさせたのが本書である。第二巻「植物の系統」、第三巻「植物の種」まで読めば現在の全体像と展望が概観できるといふ。

ド素人の評者が興味を惹かれたのは、遠く離れた島嶼へどうやって種も含めた動物が送粉にどうかかわるのかの研究であつた。生命系のような複雑で高次の現象も、しよせん物質の積み重ねによる物理化学的現象だと考える不埒な評者ではあつたが、「生きているとはどういうことか」を解明し伝えようとする編者の意欲はヒシヒシと感ずることができた。

(徳田)

## ■郷里について書かれた本

鎌田良二・編者

## 『兵庫県の方言地図』

神戸新聞総合出版センター刊

編著者の鎌田さんは一九二五年の神戸生まれで国学院大学国文科を卒業後、甲南女子大学で教鞭を取りながら兵庫県の方言や関西の共通語について数々の論文や著作を著わしてこられた。幸いなことに甲南女子大学には県下の全地域から学生が入学してくる。彼女たちの卒業研究を集成した甲南女子大学方言研究会報告Ⅰ「兵庫県言語地図」（九三年）をもとに解説をつけたのが本書である。編著者は、国立国語研究所「日本言語地図」や都築直也著、甲南大学方言研究会刊行の「兵庫県多紀郡言語地図」（九二年）、「兵庫県氷上郡言語地図」（九三年）の言語地図の方が詳細で調査地点数も多く、本

書の地図はまことに大まかだと「あとがき」で謙遜しているが、それは手足となって調査してくれた学生数の規模に関連するのかもしれない。ちなみに県内一二二箇所の調査地点の中、氷上郡内の地点は遠阪、佐治、御油、大岡（大岡？）、梶原、石生、柏原の七地点であり、やや山西部に偏っている。だが本書の狙いは、日常よく使われる九五の言葉について「ここではどう表現しますか」と聞き取って県内分布を調べるのにはあり、郡内の分布を求めるのではないからこれで十分であろう。実は、もう少しデータ数が欲しいと思うところがない訳ではない。「昨夜」はユウベとヨンベが氷上郡でも多紀郡でも混在し、三田市（地点は三個所）ではヨンベだけとなるが、これは地域よりも年令の方が大きい要因なのではなからうか。話者の年令は四五歳から七七歳と大きな幅がある。

とはいえ七五語の県内分布は興味深いものがある。殿様が譜代大名だったのか、峰山や豊岡では案外江戸言葉が使われているなど感じたことがあるが、「ママシ」は氷上・多紀郡、そして播磨一円ではハメなのに但馬一円、そして福知山や宮津では、そのままママシである。ところが「小さい（箱）」は、氷上・多紀郡、播磨一円、そして宮津や但馬南部でもコマイなのに、但馬中・北部ではコミヤリとなる。「（大根を）煮る」は氷上・多紀郡に播磨がタク、但馬と宮津ではニルで、氷上郡山西部と但馬南部では混在する。

本書は方言の年代変化も追跡している。本書の基である「兵庫県言語地図」のその基は一九七七年卒業生の調査であり、それを毎年部分的に再調査するとともに、五〇年代後期の調査に基づく「日本言語地図」や戦前の文献との年代差から方言の変遷について幅広く論じている。東

京兵庫原人会に出席しても話題がないという人にも役立つし、言語地理学への手引きにもなる良書である。

(徳田)

### ■郷里の知人が出版した本

上田 實著  
『万人の知恵』

文芸社刊

著者の上田實君とは、丹波・柏原の同級生で「竹馬の友」の間柄である。この本は、同君の父上(上田保二氏)の遺稿、旧「中総理講話」を基調に「人間と人生」につき永年の思索を集大成したものである。

上田實君は駒大大学院に学び、栃木の真岡高校、神奈川の高浜高校、尼崎小田高校、柏原高校、有馬高校、西高校等で「倫理」や「政治・経済」を教えた。退職後「宗教学」などにも関心をよせ自己の思想をまとめた

のが本書である。

この著書は、現代という時代を正しく理解するための手引書であるともいえるが、まず、人間としての真実の「自己(自然)を知る」ことが必要だとしている。つまり「自然を自然として正しく捉える」ことが自己を正しく理解する上に最も大切であり、それを基調とした人生観の確立によって現代失われがちな人間としての信用を回復し、それによってこそ科学をはじめ教育、政治、経済等が豊かな文化への発展につながるとして具体的に説明している。

また、宇宙真理が真理として我々人間生活にどのように関わってくるのか……それらについても具体例により解り易く啓発的に説明している。最終章の「宗教と科学」では、科学の立場を明確にするとともに、人間の自然に対する間違った認識をもとにした妄想的な欲によって支配される科学の危険性を指摘し、宗教のも

つ有徳性と真理(宇宙真理)により科学を正しく指導することを強調している。そして、美しい心を常に養って、自然と人生の尊さの中に、愉快に、しかも安泰な心で「永遠の喜びを獲得しよう」と述べている。本書の出版は、丹波新聞や読売新聞でも取り上げられており、原始仏教の権威で元東大教授・駒大名誉教授・水野弘元氏も「人間界・自然界の物心の一致、ひいては認識、学問、教育、政治、経済などに調和発展をもたらす原理であり、原動力である」として絶賛している。

(宮野)

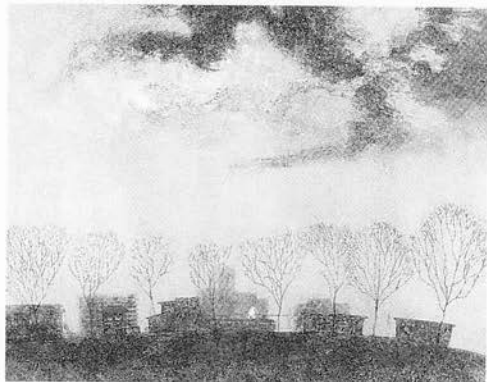


## 展覧会

## ●青垣2001年日本画展

日本画を通して豊かな感性を育むと同時に青垣町が地方からの芸術文化の発信、振興の拠点となるよう願っての全国公募展で十三回目を迎える。

大賞の大塚和哉氏の「空」は大胆な



大賞・文部大臣奨励賞受賞作品「空」

表現の空と写実味を残す木の表現の対比。優秀賞の青木英明氏の「咲く」は

「自分らしく描きたい」という作者の言葉通り、真正面から自然に向かいながら実は自己の内側にあるものを見つめようとする作画姿勢に好感を持った。

『日本画はこの四十年程殆ど変わっていないのではないか。新世紀を間近に、今、日本画に変革が求められている筈である。『絵画とは何か』『日本画とは何か』そうした問題意識を感じさせる

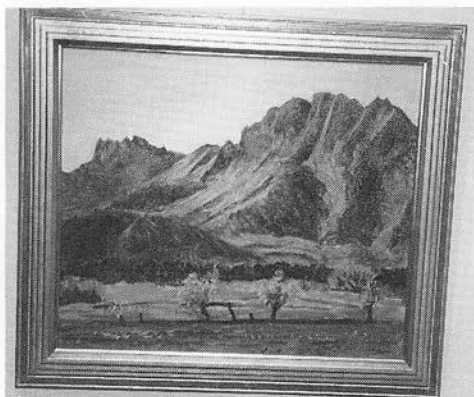
作品を期待したい——この審査委員長の言葉が心に残る。

(平成11年11月29日～12月4日、銀座洋協、アートホール)

## ●久保良雄氏合同作品展に出品

運輸省、海上保安庁、日本空港ビルディングの絵画同好会の合同作品展。

久保氏作品「妙義」は今迄の薄塗りの絵肌とは異なって、しっかりと腰をすえた厚みのある堅固な写実作品で、今



久保良雄氏作品「妙義」

までに見なかつた一面を感じた。鋭く掛かれた山に対して中腹と手前の立木あたりの明るさ、そしてほの暗い前景の大地。明暗の対比によって大自然のふところを表現し得た快作であった。おそらく構成においても作者は心の中で割り切れたものではなからうか。

(平成11年11月29日～12月5日、京橋、ギャラリークボタ)

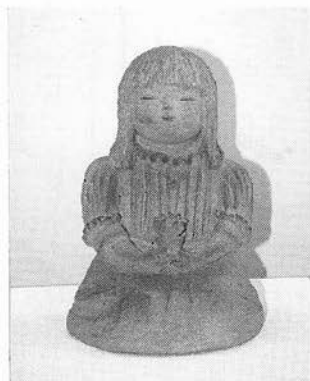


村上末吉個展「水鏡シリーズ・たゆとう木の葉」

### ●村上末吉展

郷友会前会長、村上末吉氏——水鏡シリーズ、油彩展が二〇号作品十三点をもって開催された。

一見写実とも見える作品だが、実は常時間かかっているクラシック音楽のリズムや深さを感じ取りながら、沸き上



可部美智子「花の少女」

### ●可部美智子氏陶彫展に出品

「花の少女」は花をひざにかかえて愛らしく、可部氏の作品らしい全体に丸みのあるフォルム、瞑想とでもいえ

がってくる画想が十分心の中を満たすのをまっけて初めて筆をとり、表現されたもの——それ故に独自の世界となった。「水辺の映し絵」「碧の旋律」「たゆとう木の葉」など林の中の美しい光、湖面を走る思い切った光のあつかいに不思議な世界が生まれる。「暮れなずむほとり」の美しい白の空間、「水ぬ

るむ頃」のやわらかな色調も心をなごませる。異色作「翡翠」はモナコ日本文化フェスティバルに招待出品されると伺った。真摯な作画姿勢がさすがらしい個展となった。

(平成12年5月22日～27日、銀座、文芸春秋画廊)

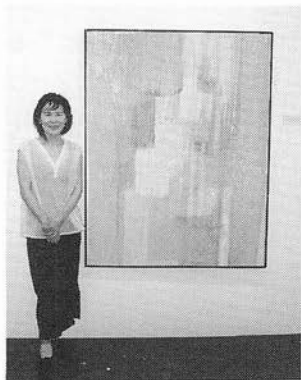
る表情でふくらとした顔が印象的。

これとは対稱的な「花器」は杵型の四角の中央をボルトでしめた表現で口の部分が直線は厳しく、側面の肌には凹凸がつけられ重みを出す。陶光会全国陶芸展常任理事、文部大臣賞、東京都知事賞等受賞。昨春秋には足利・乾ギャラリーで個展開催。

(平成12年6月12日～18日、銀座、アートホール)

## ●荻野美穂子個展

前回（平成9年）の発表から抽象画に転じ、以後抽象に徹している。水彩を基調にしてアクリル、クレパス、色鉛筆等を加える。一瞬々々の思いつくままを色と絵肌の工夫で描いた作風と、自然現象から感じたものを心の中でしっかりとかたまってくるのを待って製作した二つの作風があるが、前者の場合には無心に近い楽しさが伝わってくるが、これは後者の作品を描く為に絵画の重要な一つの側面である遊びとして必要なのである。作者の本命と思われる



荻野美穂子個展作「riu」

後者の作風は「riu」は川の流れを、「KOKU」は厳しい冬の酷を、「BI」は微風を——というように、自然から受けた印象を抽象している。「riu」

は上野の森美術館に出品して受賞に今一步及ばなかった作品という。大小約三十数点の出品。前回よりも作品に幅と厚み加わってきたように思った。

（平成12年7月20日～25日、銀座、ギャリリ・しらの）

〈以上・常岡〉

## 同好会

## ●柏原高等学校「好楽会」発足50周年記念音楽会

平成12年8月13日、表題の音楽会が丹波の森公苑ホールで開催されました。

好楽会は柏原高校のコーラス部の現役と卒業生で組織する会で毎年一回総会が開かれている全国的にも珍しい会です。





その会も今年は50周年を迎え第一回生（24年卒）から現役までが一堂に会しての演奏会を開催しました。

そのときどきにご指導いただいた恩師を囲みその同世代のグループごとの演奏と現役の清純な歌声のステージそれに全員での合同合唱（15歳～70ウン歳）と、その時代々に親しんだ曲を披露し楽しい演奏会となりました。

また懇親会では橋本先生や内田先生から発足時のエピソードや苦勞話なども披露され、改めて「好楽会」の歴史の長さとその会員の一人であることの幸せを感じさせられた一日でした。

会員の数は千名をこしています。『山ざる』誌読者の中にも多くの会員の方がいらっしやると思います、ぜひ次回の好楽会には参加して旧交を暖め合いまししょう。

（第6回生・飯田光雄）

## 同窓会

### ‘00 柏陵同窓会東京支部総会

平成12年5月28日(日)、九段会館において開催された。本部から植田憲雄柏陵同窓会長、石川憲幸同副会長、母校から渡辺秀樹校長（高校11回生）のご出席を得て60余名が集った。

総会に先立ち、スウェーデン在住の高見幸子さん（高校20回生）を講師に招き、「柏陵セミナー」を開いた。初の試みであったが、活発な質疑応答がくりひろげられ、予定の時間があつという間に過ぎてしまった。高見さんは彼我を往き来して、環境問題や幼少年教育活動（森のムツレ教室）にボランティアで取り組んでおられる。セミナーの題名は、「丹波・スウェーデンそして日本」

総会では役員の任期満了（2年）による改選が審議され、執行部より提案のあつた候補全員を承認、議案は可決

された。この結果、高見嘉都司支部長、神田敏博、小田富士夫、千葉淳子、鶴田ゆき子各副支部長の留任、留任・新任理事102名、水船隆昌、坂本重雄各監事の留任等が決まった。平成14年の総会開催日までが任期となる。

また、平成13年度から、総会の運営には、年次ごとに各学年があたることになった。ちなみに、平成13年度総会（五月開催予定）は高校7回・8回生の担当となる。会場設定、招待状の制作（付属制作物も）、宛名処理、封入発送、セミナー準備、出席者名簿作成、当日会場運営など、こまごまとした仕事に、ボランティアで取り組んでもらうことになるが、支部活性化のため、よろしく願いたい。

（事務局・坂上勝朗）



## ●修学旅行よもう一度、 柏高8回生45年ぶりの旅

郷里の柏高8回生が修学旅行をもう一遍行いたい、ということで行P A R T 2」を企画してくれ、昨年10月4日～6日の2泊3日の箱根、日光、東京方面への修学旅行は45年ぶりに再現されました。45年前は、何か間違っていたら困るといって、男女別々に行われましたが、もう大丈夫だろうということになって、今回は男女合同で恩師の荒木逸郎・家島哲次両先生も参加され約60人が思い出深い旅をしました。

関西方面組約50人は4日午前9時にJR新大阪駅に集合、関東組約10人と熱海で合流、バス2台で十国峠を越え、箱根関所跡資料館をみて、芦ノ湖遊覧船に乗り、大涌谷をロープウェイで渡り、箱根湯本温泉で一泊、5日早朝ホテル南風荘を出発して東名・首都高速で一気に日光に行き、東照宮を参拝し

てから華厳の滝をみて鬼怒川温泉で二泊、それから浅草観音・仲見世でお土産を買って帰るといって45年前と旅行のコースはほとんど変わらなかったのですが、全く変わってしまいましたのは参加した柏高8回生の人柄でした。45年前は戦後の混乱する日本の現状



が郷里の柏高にも色濃く表れていて、何人かの先生は軍服を着て教壇に立っておられましたから、戦争は終わっていたのですが、日本がどのようなのか全くわからず、私を含め柏高生は何か悲壮感のようなものが漂っていました。今回の旅行ではそのような現実とは一変した中で、45年ぶりに出合った人もあり、どのような話をすれば理解されるのか戸惑いましたが、黄昏の青春ということもあってみんなが一抹の不安があることを感じました。しかし私を驚かせたのはそれ以上に、何か安堵感のようなものが満ち溢れていて、懇親が一層深まったことは間違いないということでした。

今回は幹事さんの配慮で自由恋愛が許されるということで箱根、日光のホテルでは45年前からひそかに思いを寄せていた人が、その思いを告げることができる絶好の機会でしたが、それがどのようなになったのか私の知る由もないところです。(8回生・足立静雄)

## ●柏九会、高野山・熊野詣で

今夏も「柏九会」は、同期生で氷上郡の名刹・石倉寺住職の堀井隆水さん（母校の前校長）の案内で、高野山詣を行ないました。今年は少し目先を変え、熊野本宮まで足を延ばし、川湯温泉に泊まって懇親を深めるという趣向でした。

8月5日。早朝丹波を発ったバスに大阪駅前で京阪神組と関東組が加わり、総勢40名。母校の元校長で恩師の植田憲雄先生も特別参加されていました。高野山奥の院では全員で繁若心経を唱えました。

登り来てここ霊場の夏木立 マサ子 参詣後は一路川湯温泉へ。バスの中では用意されたゲームに興じました。ゲームの賞品はなんと最高3億円。と言ってもその可能性のあるサマージャンボ宝籤。少なくとも1億円の望みは参加者全員に行き渡る幹事さんの配慮でした。



宿では清流の傍の露天湯を楽しみ、宴会の後も全員が一部屋に集まり、深更まで語り合いました。

翌日は熊野本宮に参拝。帰路は十津川渓谷沿いの古い街道を辿りました。途中にある長さが日本一だという谷瀬

の大吊橋。おおよそ半分の人には恐くて渡れませんでした。

吊橋に万緑の嶺ゆらぎけり 功  
帰路の車中では、東京土産として余田功さんが、高校時代の思い出につながる佐藤春夫の詩「望郷五月歌」（故郷・熊野を偲ぶ長い詩）を見事に誦読し、その抜群の記憶力に一同賛嘆。

記憶力の話から私達にも身近になってきた老人力のことに及び、老人力テストも行われました。そして内科医である芦田乃介さんのたいへん興味深い解説。堀井隆水さんからも、柏九会高野山詣が始まったいきさつに関連して、これからの生き方と心の持ち方について面白いお話がありました。誰かの声「柏九会の我々は安心だね。なにしろ医者と坊主がいるのだから」に一同大笑い。

バスが大阪駅前に着いたときには別れるのがほんとうに名残り惜しかった、そんな2日間でした。

（氷上町・小林和子）

猿

友

会

井田悦子  
喜田綾子  
長尾貴美代

大石佐代子  
小糸イキ  
安原三智子

小田明子  
笹倉郁子  
塩見みつえ

可部美智子  
篠原よね子  
渡邊貴美子

岸本昌子  
千葉淳子



株式会社 **三 葉 水 道**

代表取締役 **橋 爪 忠**

(氷上町黒田出身)

〒276-0034 千葉県八千代市八千代台西 7-5-29

電 話 0474-84-7121 FAX 0474-82-9626

エクステリア専門商社

株式会社 **トコナメエプコス**

代表取締役 **松 下 文 雄** (柏原町)

常務取締役 **広 瀬 寿 和** (山南町)

〒166-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル

TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

調布市文化会館たづくり内  
アカデミー愛とぴあ  
文芸誌「たきおん」同人

木 村 つ た 江

〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘2-39-5  
電話 03-3300-6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状	第2-319号
技術士（電気部門）登録証	第15810号
エネルギー管理士（電気）免状	第 2857号
エネルギー管理士（熱）免状	第 5191号

**若 森 技 術 士 事 務 所**

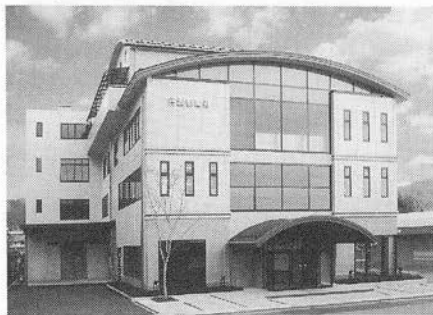
所 長 若 森 敏 郎

〒302-0023 茨城県取手市白山5-4-13  
TEL・FAX 0297-72-0907

◆本誌発行にご協力有難うございました

1924年創刊 週2回(日・木)発行  
1ヵ月1,220円(郵送料200円)

全国各地、海外で活躍する丹波出身者の近況を  
紹介する **丹波人NOW** が好評です。



## 丹波新聞社

〒669-3309 兵庫県水上郡柏原町柏原201  
Tel 0795(72)0530 Fax 0795(72)1956  
▶ホームページをご覧ください。  
<http://www.tamba.co.jp>



代表取締役社長 小田晋作

関東とふるさとをつなぐ「グローカル」な紙面

東・名・阪で事業展開中  
丹波出身の人材・来たれ!!  
東京から丹波路への物流を目指して

## 三協運輸株式会社

取締役社長 岸本 勲

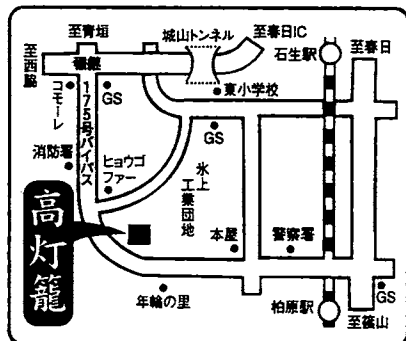
(氷上町出身)

本 社 〒121-0064 東京都足立区保木間 1-1-3  
TEL 03 (3860) 8112 FAX 03 (3860) 1631  
大 阪 支 店 〒578-0911 大阪府東大阪市中新開 2-5-26-201  
TEL 0729 (64) 6499 FAX 0729 (64) 6517  
名古屋事業所 〒457-0837 愛知県名古屋市南区加福町 3-5  
TEL 052 (691) 8574 FAX 052 (612) 2032  
埼 玉 支 店 〒363-0008 埼玉県桶川市大字加納字 379-1  
TEL 048 (728) 9380 FAX 048 (728) 9381  
倉 庫 東京・大阪・名古屋・埼玉・兵庫

日本の真ん中から出た  
柏原天然温泉

たかとうろう  
**高灯籠**

TEL **0795-73-1126**



・寶鏡自動車道春日ICより城山トンネルを経て信号(縦線)左折、約1km

入浴料：大人550円（中学生以上）  
子供250円（小学生）  
幼児100円

営業時間：朝9時～深夜1時  
深夜3時（土）

定休日：毎月第3木曜日

ビル・マンションの総合管理

株式会社 **長友**

取締役社長 谷口 浩章

（水上市出身）

本社 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-6  
TEL 03 (3257) 9611 FAX 03 (3257) 9619  
E-mail h.taniguchi@mx4.ttcn.ne.jp

大阪支店 〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-5-7  
TEL 06 (6222) 5076 FAX 06 (6222) 5025



製造品目

船舶・艦艇・陸上用・自動制御盤  
始動器・分電盤等

日本工業規格表示許可工場



桑畑電機株式会社

代表取締役社長 桑畑芳郎  
(柏中48回卒)

大阪市大正区泉尾2丁目22-3

TEL 06-552-0951 代表 FAX 06-552-0955

パソコン開発・データ入力

有限会社 ケーエスシステムサポート

代表取締役 藤田 徹

〒134-0083 東京都江戸川区中葛西5-41-8  
金栄ビル2・3F  
TEL 03-3675-4351

東京都ユニバーサルホッケー協会副会長  
府中市教育委員会認定市民スポーツ指導員  
東京都渋谷区日中友好協会理事  
E M ネット 埼京理事

足立和巳

〒183-0051 東京都府中市栄町一―一五―二七  
TEL・FAX 〇四二―三六四―七三二七

足立かをる

足立勲平

〒251-0031 藤沢市鶴沼藤ヶ谷一―七―四  
電話 〇四六六―三二―六四六一

ミワ電気工事株式会社

代表取締役 足立謙悟

〒235-0033 横浜市磯子区杉田五―二二―九  
電話 〇四五―七七二―二二六一  
FAX 〇四五―七七二―二二六四

足立静雄

株式会社 トレンタ

足立真一

〒211-0005 川崎市中原区新丸子町七〇―  
電話 〇四四―七二二―六三七一  
自宅電話 〇四四―八五四―六三四〇

足立誠一

〒248-0031 鎌倉市鎌倉山四-八-一二五  
電話〇四六七-三二-三六〇〇

日本損害保険協会特級(二般)資格第特一三五八六号  
飯田保険事務所

飯田光雄

〒285-0045 千葉県佐倉市白銀四-十四-十五  
電話〇四三-四八五-〇五〇三  
FAX 〇四三-四八五-〇二九一

明治四年創業・伝統銘茶  
株式会社 明日香園

代表取締役 池畑豪士郎

本社 東京都豊島区南池袋二-二六-一五  
電話 〇三-三九八-〇一四七三二  
直販店 西武百貨店池袋本店B1  
電話 〇三-五九五-二一五〇七六(直通)

生田清弘

東京都世田谷区成城一-七-七七  
電話 〇三-三四-一五一-八九三

井本義一

上田脩

〒112-0015 東京都文京区目白台  
二一九-一八-四〇三

有限会社 PCC大洋

岡 吉 明

〒351-0014

朝霞市膝折町三-七-五  
TEL 〇四八-四六〇-一六〇一  
FAX 〇四八-四六〇-二三九七

荻野 武

小田 富士夫

梶原 やす子 清

片岡クミ子

株式会社 京浜

代表取締役 上<sup>カミ</sup>武<sup>タケ</sup>正次

本社 〒292-0826 千葉県木更津市畑沢南一-二-三七

TEL 〇四三八-三六一二二-一(代表)

FAX 〇四三八-三六一二二-〇七

営業所 千葉・市原・高柳

株式会社 アイ・ケイ・アイ

代表取締役 岸 田 勇

〒103  
10013

東京都中央区日本橋人形町三丁目一〇  
電話 〇三―三二四九―五二六一

木呂子 恵美子

〒204  
10012

東京都清瀬市中清戸二丁目七五〇―八  
電話 〇四二四―九一―三〇三三

久保 春 雄

〒300  
10031

土浦市東崎町十三丁目二一六〇四  
電話 〇二九八―二二―二九七八

栗 田 功

坂 上 明

坂 上 勝 朗

坂  
本  
重  
雄

〒193  
|  
0816

東京都八王子市大楽寺町三八七―二〇  
電話 〇四二六―二六―七〇八六

坂  
上  
豊

坂  
上  
五  
朗

高  
見  
嘉  
都  
司

〒173  
|  
0025

東京都板橋区熊野町四〇番十一号  
電話 〇三一三九五六―〇六〇〇

合唱指揮者

笹  
倉  
強

〒352  
|  
0014

新座市栄四―五―二一五  
TEL・FAX 〇四八―四七七―五六四〇

佐  
々  
木  
盛  
雄

〒161  
|  
0035

東京都新宿区中井二―十一―十八

(株)フジサンケイリビングサービス  
セントラル・インパックス(株) 専務取締役  
代表取締役

高 見 秀 史

会社TEL 〇三―五三三―一〇〇―  
自宅TEL 〇四七―四三九―一六九―

千 種 倫 幸

常 岡 幹 彦

鶴 田 宏

田 英 夫

〒100―0014 東京都千代田区永田町二―一―一  
参議院議員会館229号室  
電話 〇三―三五八―一三二― 内線 五三二九

日本舞踊  
西 崎 祥  
端 唄  
根 岸 妙

〒224―0027 横浜市都筑区大圃町五〇〇―一八  
電話 〇四五―五九一―六六五五

波多洋三

〒112-0003 東京都文京区春日二-1-71-2  
電話 〇三-三八-二二八六〇

青葉山 眞照寺  
八王子 青葉霊苑 (都営八王子霊園隣り  
第二期墓地区分譲案内中)

住職 堀井隆川

〒193-0826 東京都八王子市元八王子町三-1-33-9七  
電話 〇四-二六-六三一八四〇三

瑞豊産業株式会社

代表取締役  
社長

水船隆昌

〒102-0076 東京都千代田区五番町六  
グレイス五番町ビル7F  
電話 〇三-三三-二二二-一七三五

東京都行政書士會理事・東京都行政書士會八王子支部理事  
小口・宮野合同事務所 所長

行政書士 宮野近

事務所 〒192-0063 八王子市元横山町二-1-81-3 宮野ビル  
電話 FAX 〇四-二六-1281-353  
自宅 〒192-0911 八王子市打越町一-2-31-3  
電話 〇四-二六-1351-4385

ウエディングドレス専門創作卸  
株式会社 シヤルム商会

常務取締役 村上昇

東京店 〒164-0013 東京都中野区弥生三-1-51-3  
電話 〇三-13-3741-0215(代)  
本社 〒604-0885 京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五  
電話 〇七五-1221-1021-15(代)

村上久夫

〒168-0072 東京都杉並区高井戸東三-14-12  
電話 〇三-13-3331-1713-4



◆本誌発行にご協力有難うございました

渡邊隆男

PHP文化フォーラム 増生の宿  
代表 吉住自由造

〒216-0033 川崎市宮前区宮崎五-1-35  
電話 〇四四-八六六-三六二

〒196-0031 東京都昭島市福島町二-1-〇-127  
電話 〇四二-五四四-八八六-

山口和久

惠理子  
藤吉郎秀吉  
寧々・愛々・茶々

さすが  
&  
されど

## 60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌 [ さすが & されど ] 好評発売中

本誌は読者投稿を主体に編集するユニークな雑誌です  
/ 日々の暮らしから世直しまで知恵と体験を交流し合  
います / 年間購読料 3,500円 (税・送料込み) 下記へ。

時代と共にあなたの歴史

### 自分史年表

一家に一冊 / 書く・読む・調べる記入式  
歴史年表 / 定価 1,800円 (税・送料込み)

これから書きつぐ生活ノート

### メモリー50

1年2ページ、50年間書ける気軽な  
メモ帳 / 定価 1,800円 (税・送料込み)

記念の年に贈る同時代シリーズ ▶ [ 昭和6年生まれ / 昭和16年生まれ ]  
既刊 ▶ [ 昭和4年・5年 / 昭和11年・12年・13年・14年・15年 ] ■各巻3500円

株式会社 **ホンゴ出版**

代表取締役 池田 忍

東京都中央区八丁堀 1-8-2  
〒104-0032 ☎03 (3537) 6221  
<http://www2.ocn.ne.jp/~hcngo/>

# 会 計 報 告 書

関東氷上郷友会

(平成11年7月1日～平成12年6月30日)

会計理事・谷口 浩章

鶴田ゆき子

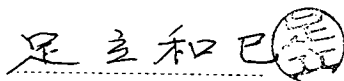
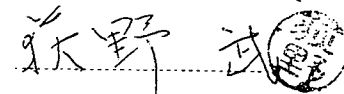
(単位：円)

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	1,055,768	郵便貯金 255,768円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円	出 版 費	885,077	『山ざる』30号
			通 信 ・ 印 刷 費	389,030	総会・役員会案内等
年 会 費 収 入	885,500	延 357名	総 会 費	383,713	総会関係支払
総 会 費 収 入	309,000	52名	会 議 費	271,966	役員会等
役 員 会 費 収 入	136,000	延 38名	支 払 手 数 料	26,140	送金手数料 3,440円 振替手数料 14,310円
編 集 会 費 収 入	48,000	12名			
寄 付 金	346,000	延 68名	消 耗 ・ 備 品 費	54,355	
広 告 料 収 入	867,500	延 77名	繰 越 金	1,637,648	郵便貯金 833,868円 定額貯金 800,000円 振替貯金 2,930円 現 金 850円
受 取 利 息	161	郵便貯金 161円			
合 計	3,647,929		合 計	3,647,929	

監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成12年7月27日

会計監査

集	編
記	後

★最近は仕事の関係で高齢者の方と一緒に唱歌「ふるさと」を歌う機会が多くなりました。「ふるさと」を

歌っていると、自然に国鉄福知山線時代の丹波の風景が浮かんできます。丹波が身体に染み込んでいられるのかもしれない。微力を承知で「山ざる」誌編集に参加させてもらっています。(本城)

★関東水上郷友会の友は皆共通のふる里(水上郡)を持ち、田舎でなら感じる地域差(例えば中央・山東、山西、山南)もなく東京では皆一つとして受け止めている。先人は百年以上も前にこの会を起し水上郡を一つにまとめてしまっている。このほど水上郡六町合併協議会が発足、合併について地元住民意識は賛否半々とか。今後の道のけわしさを予感されている。その昔(昭和30年)、町村合併のときも同じような議論があり、結果は現状である。ここで又々合併会議が持ち上がっている。規模が大きくなるだけの話

で合併後の予測は立つ。しかし時代の趨勢には、なにびとも抗しきれない大きなものがある。ふる里水上郡がどのようなまとまっていくなのか楽しみに見守りたい。(鶴田)

★我が雑草の庭には、今、紫式部とすきがちよつと良い風情です。この東京の外れの西部線沿線に同期の友が居て、時々観劇や映画を一緒にしたり、昨年は彼女のお宅で、居ながらにして満開の桜を拝見、今年も、年一回公開の清瀬高校の庭園のあじさい見物に誘い、丁度、我が家に丹波の親戚から届いていた新茶の封を切り二人で分けました。晩年に恵まれた、よき丹波」という感じの心豊かな友です。さて今年も郷友会で、どのような方とお目にかかれるか楽しみです。

★故山本求画伯の想い出を書ける人が周辺におられましたらご一報ください。特に元マリオネット班員は大歓迎です。(徳田)

★丹波の春もいいが、山里の秋の風情もいい。色づきはじめて木々を渡るひんやりした風、熟した柿や栗の香気を含んだ風が流れるのを今も実感できる。あの静けさに身を置けば、何もかもがはかなく、それでいて充足感が沁みてくる。今も山里は、そんな気分がさせてくれるであろう。異常な暑さの夏が過ぎて、やはり季節はめぐり巡る。(池田)

## 山ざる 第31号

平成十二年十一月一日発行

編集委員) 足立静雄 池田 忍 木呂子恵美子  
足立和巳 大野善三 小田富士夫  
片岡クミ子 坂上勝朗 常岡幹彦  
鶴田ゆき子 徳田八郎衛 本城英明  
宮野 近 渡邊隆男

発行者 関東水上郷友会会長 渡邊 隆男

〒101-0051 東京都千代田区神田小川町1-2  
DMSビル内・関東水上郷友会・事務局

☎〇三(三三九三)二九六一

振替〇〇一〇一〇三三三三三三〇〇

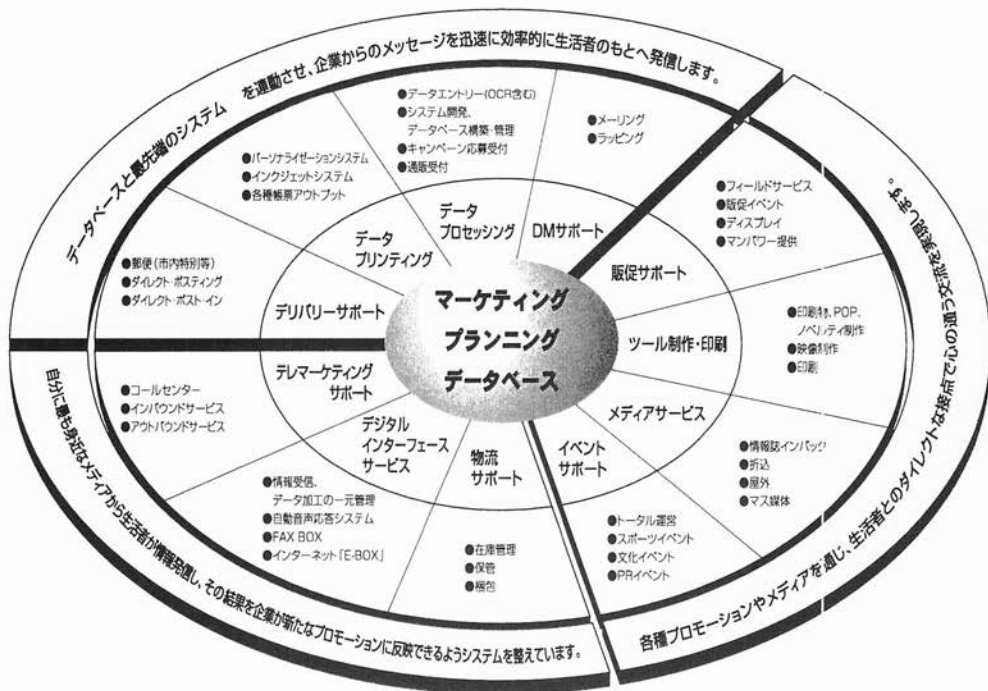
製 作 株式会社ニ玄社

編集協力 株式会社ホンゴ出版

# ダイレクト・コミュニケーション・トータルサービス Direct Communication Total Service

当社の提供するダイレクト・コミュニケーションの中核には、常に時代の動向を見据えて開発を進めて来たマーケティング、プランニング、データベースのノウハウがあり、企業と生活者の日々変化し多様化するニーズにも即座に対応できるフレキシブルなシステムを構築しています。

当社は、幅広い領域に及ぶダイレクト・コミュニケーションのサービス全般を自社内で一貫して運営することによって、業務の効率化、高品質化、迅速化に貢献すると共に、トータルサービス・エージェンシーならではの新しい付加価値を創造し、企業にご提案しています。



効率化

高品質化

迅速化

新しい付加価値の創造とご提案



株式会社 ディーエムエス

本社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1-11 大阪支社 〒535-0031 大阪市旭区高殿7-15-8

●お問い合わせ：営業企画部 TEL.03-3293-2970 (代)

# 故宮博物院名蹟の完全複製

当社は台北の故宮博物院と合作、中国歴代の名筆名画四百余点を厳選し、二十余年の歳月をかけ、先進技術の粋を駆使し、原蹟と寸分たがわぬ完全複製を完成、美術界の画期的大事業と世界の称賛を集めています。床の間に居間に、贈答に、悠久の芸術境をお楽しみください。詳細カタログ進呈。水上郷友会々員には卸価格で提供。下記社長宛へ一報下さい。

二玄社  
社長 渡邊隆男

東京都千代田区神田  
神保町2-2/〒101-8419  
電話03-5210-4733  
Fax. 03-5210-4723  
<http://nigensha.co.jp>



## P 35 徐渭 榴実図 (明時代)

徐渭は詩文書画ともに傑れ、興に乗って一気呵成に描きあげる水墨花卉は瀟洒超凡、近世文人画に大きな影響を与えます。垂枝に石榴の実をひとつ描く本図、卓越した構図と固勁の筆致、風趣比類ない徐渭の代表作。山深くして石榴熟す、日に向い口を開いて笑う。深山にして人の収むること少なく、顆顆明珠走る。自題の行書五絶また筆意奔放、詩書画三絶の妙境を示します。

絹本・墨画 桐箱入  
画面寸法=91.4cm×26.5cm  
軸装寸法=縦186.0cm×横41.6cm  
(頒価 税込 47,250円)  
郷友会々員特別価格 33,000円